



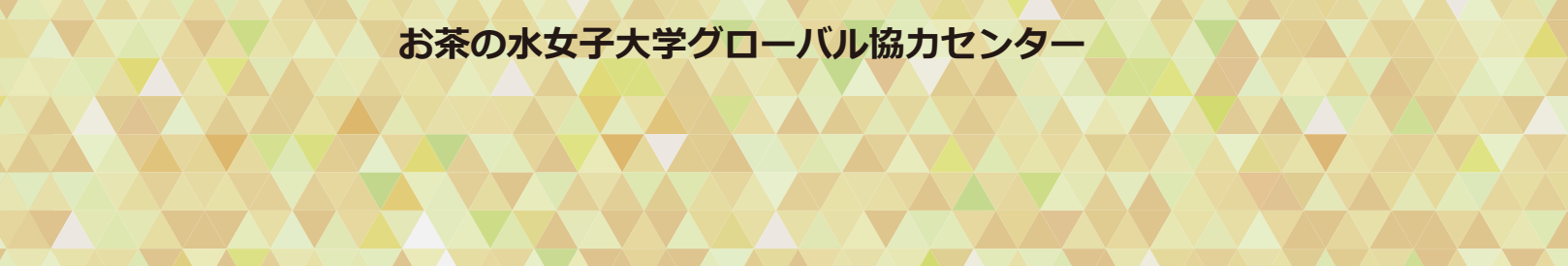
グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和 4（2022）年度

「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」
スタディツアー（ブータン）実施報告書

2023 年 3 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター



はじめに

本海外実習は、平成 23（2011）年度に学生による実習（海外スタディツアー）として開始し、平成 25 年（2013）年度から通年の単位認定実習科目「国際共生社会論実習」と「国際共生社会論フィールド実習」として実施して参りました。この科目は、専攻や学年を問わず開発途上国の社会・政治・経済に関わる問題や国際協力に関心を有する学生が事前学習、現地調査、事後学習を実施し、都市と農村の格差、貧困問題、教育、保健、ジェンダー等に関するテーマについて、文献だけでは得ることのできない知識や経験を得、理解を深めることを目的としています。過去 9 年間に、東ティモール、ベトナム、フィリピン、バングラデシュ、ネパール、カンボジアの 6 カ国で現地調査を行いました。

この科目は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け 2020 年度より休講となっていました。が、今年度は開講し、学部 1 年生から 3 年生まで、専攻も学年も異なる 7 名の学生がブータンで現地調査を行いました。現地では、JICA（独立行政法人国際協力機構）ブータン事務所、伝統技芸院、ゾンカ開発委員会、ティンプー市役所、ブータン日本語学校、王立ブータン大学パロ教育カレッジなどを訪れ、関係者の方々からお話を伺わせていただきました。

学生は、事前学習（主に 11～12 月）を通して訪問国の状況を理解したうえで現地調査（2 月）を行い、帰国後に報告書を作成しながらその内容を振り返りました。本報告書は、学生による調査報告書及び訪問記録をまとめたものです。この海外実習を通した一連の学びが、学生のさらなる学習と研究や国際協力の実践活動に繋がっていくことを期待しています。

末筆ながら、現地での本学学生の受入れに快くご協力いただくとともに、見学とインタビュー等にご支援ご協力を頂いた関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

2023 年 3 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

センター長 由良 敬

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和4（2022）年度
「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」
スタディツアー（ブータン）実施報告書
目次

はじめに

1. 活動の概要	1
(1) 科目概要	3
(2) 2022 年度の内容	3
2. 学生報告	5
(1) ブータン基礎情報	7
(2) 現地調査日程	8
(3) 参加者名簿	9
(4) 調査報告書	9
(5) 訪問記録	49
(6) 写真	69
3. 資料	71
(1) 募集要項	73
(2) 全体スケジュール	75

1. 活動の概要

(1) 科目概要

【主題】

本科目は、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGs に関する理解を深めることを目的に実施する実習科目である。

履修生は、①事前学習、②現地調査、③事後学習を行い、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題についての理解を深める。具体的には、①事前学習において、資料の購読・発表、外部有識者による講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。②現地調査では、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織へのインタビュー等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する（国際共生社会実現へのヒントを見つける）。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、報告会の開催等を通してその成果を外部へ発信する。

【到達目標】

- 漠然とした興味関心・問題意識を、学術的な研究課題として組み立てまとめる力を身につける。
- 現地調査の計画及び実践を通して、調査技法を身につける。
- 現地調査（特にインタビューの実践）を通して、英語によるコミュニケーション能力を向上させる。
- プログラムを通して得た学びを、さらなる学習・研究や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア等）に繋げる。

(2) 2022 年度の内容

今年度は訪問国をブータン王国（Kingdom of Bhutan、以下ブータン）1 ヲ国に設定し、8 月渡航チーム（履修生 5 名）と 2 月渡航チーム（履修生 5 名）の 2 チーム体制で始動したが、新型コロナウイルス感染症の影響等から、最終的には 2 月にまとめて現地調査を行うこととなった。スケジュール変更や渡航費の増大を受け、3 名が履修取消を行った。

オリエンテーション、事前学習、自主活動、渡航前の数回のミーティングを経て、2023 年 2 月 7 日～16 日（合計 10 日間、現地滞在 7 泊 8 日）の日程で履修生 7 名（学部 1 年：3 名、学部 2 年：2 名、学部 3 年：2 名）が現地調査を行った。引率はグローバル協力センターの平山講師と駒田 AA が行った。現地調査中、履修生は「ごみの不法投棄と国民の衛生意識」、「伝統芸術における性別分業とジェンダーアイデンティティ」、「ナショナルアイデンティティの実態」、「LGBTQ+への寛容度」、「交通網が食に及ぼす影響」といった各自が設定した研究課題の遂行のため、関連機関への訪問や人々へのインタビューを実施した。

2. 学生報告

(1) ブータン基礎情報

※外務省 HP: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html> (最終閲覧: 2023 年 3 月 1 日) から抜粋。

【基礎情報】

政体	立憲君主制
面積	約 38,394 平方キロメートル (九州とほぼ同じ)
人口	約 77.9 万人 (2021 年: 世銀資料)
首都	ティンプー (Thimphu)
民族	チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等
言語	ゾンカ語 (公用語) 等
宗教	チベット系仏教、ヒンドゥー教等
主要産業	農業、林業、電力 (水力発電)、観光
名目 GDP	23.2 億ドル (2020 年: 世銀資料)
一人当たり GDP	3,000 米ドル (2020 年: 世銀資料)
経済成長率	-10.1% (2020 年: 世銀資料)
経済概況	(1) ブータン政府は、1961 年以降、5 年ごとに策定される開発計画に基づく社会経済開発を実施。2018 年からは、第 12 次 5 ヶ年計画が開始された。就労人口の多くが農業に従事しており農業が重要な位置を占めているが、近年は水力発電所の建設や周辺国への売電を含む電力セクターの開発により、工業部門の GDP に占める割合が上昇している。 (2) ブータンは、国内市場が小さく、ほとんどすべての消費財や資本財をインド及び他国からの輸入に依存しているため、慢性的な貿易赤字を抱えている。インドとの輸出入が圧倒的なシェアを占める中で、インド・ルピー以外の外貨収入を得る手段として豊かな観光資源の開発も重要な課題となっている。 (3) 開発の原則として、国民総生産 (GNP) に対置される概念として、国民総幸福量 (GNH: Gross National Happiness) という独自の概念を提唱している。経済成長の観点を過度に重視する考え方を見直し、経済成長と開発、文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、良き統治の 4 つを柱として、国民の幸福に資する開発の重要性を唱えている。

【略史】

17 世紀、この地域に移住したチベットの僧侶ガワン・ナムゲルが、各地に割拠する群雄を征服し、ほぼ現在の国土に相当する地域で聖俗界の実権を掌握。

19 世紀末に至り東部トンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュクが支配的郡長として台頭し、1907 年、同ウゲン・ワンチュクがラマ僧や住民に推され初代の世襲藩王に就任、現王国の基礎を確立。1952 年に即位した第 3 代国王は、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始し

たが、1964 年、地方豪族間の争いに起因する当時の首相暗殺や、その後に任命された首相による宮廷革命の企みの発覚を契機に、首相職が廃止され、国王親政となった。1972 年に 16 歳で即位した第 4 代国王は、第 3 代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、王政から立憲君主制への移行準備を主導。2006 年 12 月、第 4 代国王の退位により、現国王（第 5 代国王）が王位を継承。2007 年 12 月及び 2008 年の総選挙を経て、2008 年 4 月に民主的に選出されたティンレイ政権が誕生し、5 月には国会が召集され、7 月に憲法が施行し、王政から議会制民主主義を基本とする立憲君主制に移行した。

2008 年 11 月に、現国王の戴冠式が行われた。2013 年には第 2 回総選挙が実施され、また、2018 年 11 月の第 3 回総選挙を経てブータン協同党（DNT）党首ロティ・ツェリンが首相に就任した。

（2）現地調査日程

	月日	活動内容	宿泊地
1	2月7日（火）	成田空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着	—
2	8日（水）	パロ空港到着 JICA ブータン事務所訪問 JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへインタビュー ティンプー市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	ティンプー
3	9日（木）	ゾンカ開発委員会訪問 ティンプー市役所訪問 伝統技芸院訪問 ブータン日本語学校訪問 ブータン日本語学校の学生と交流 ティンプー市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	ティンプー
4	10日（金）	キリスト教の教会訪問 プナカ・ゾン訪問 高地牧畜民にインタビュー	ティンプー
5	11日（土）	ファブラボ CST（王立ブータン大学科学技術カレッジ）訪問 シク教の寺院訪問 プンツォリン市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	プンツォリン
6	12日（日）	ホームステイ先近隣散策 ホストファミリーと交流	パロ
7	13日（月）	西岡ミュージアム（農業機械公社／農業機械化センター）訪問 西岡チョルテン訪問 伝統舞踊の踊り手へインタビュー 王立ブータン大学パロ教育カレッジ訪問 パロ市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	パロ
8	14日（火）	タクツァン僧院訪問 国立博物館訪問 パロ市内散策／各自の研究活動（インタビュー等）	パロ
9	15日（水）	パロ空港出発 バンコク・スワンナプーム空港到着	機内
10	16日（木）	羽田空港到着	—

(3) 参加者名簿

氏名	学年	学部・学科・専攻
今野 春子	1 年	文教育学部言語文化学科
リップル アメリ	1 年	文教育学部人間社会科学科
鈴木 満央	1 年	理学部生物学科
安藤 承子	2 年	文教育学部人文科学科比較歴史学コース
山本 愛理	2 年	文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コース
田村 彩佳	3 年	文教育学部人文科学科グローバル文化学環
石田 優花	3 年	文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環
引率者		
平山 雄大	講師	グローバル協力センター
駒田 千晶	アカデミック・アシスタント	グローバル協力センター

(4) 調査報告書

氏名	タイトル
今野 春子	ゾンカ語はブータン国民のナショナルアイデンティティにどの程度影響を与えるか
リップル アメリ	ブータン国民におけるナショナルアイデンティティの実態
鈴木 満央	「幸せの国」ブータンの国家政策と国の発展について
安藤 承子	“幸せの国”ブータンにおける“不幸せな”ごみの不法投棄と国民の衛生意識
山本 愛理	ブータンの伝統芸術における性別分業とジェンダーアイデンティティ
田村 彩佳	ブータンの交通網が食に及ぼす影響
石田 優花	ブータンにおける LGBTQ+への寛容度

ゾンカ語はブータン国民のナショナルアイデンティティに どの程度影響を与えるか

文教育学部言語文化学科 1 年

今野 春子

1. 調査テーマ

1.1 テーマ

今回のスタディツアーにおける調査テーマは、ゾンカ語とブータン国民のナショナルアイデンティティの関係である。ブータンでは独立した近代国家としての地位を国際社会で確立させるために、1980 年代から国語としてのゾンカ語の開発が開始された。それまでは国民全体が共有する言語はなく、ゾンカ語も 20 以上の民族言語の 1 つに過ぎなかった。そのような中で次第に共通の母語を持たない人同士の意思疎通に使用される言語「リングア・フランカ」としてゾンカ語が用いられるようになっていったため、ゾンカ語を公式な国語とするために DDC（ゾンカ開発委員会）が設立された。しかしゾンカ語を国語とするには多くのハードルも存在した。まずゾンカ語は元々文字を持たない話し言葉であり、書き言葉には古典チベット語が用いられていた。そのため新たな文字や綴り、表記法などを確立させる必要があった。またゾンカ語は元々仏教用語であったため、日常生活や教育の面において語彙が著しく足りていなかった。これらの状況に加えて現代においてもゾンカ語を母語とする人々は国民の 3 分の 1 程度しかおらず、ゾンカ語の語彙の少なさから教育のほとんどは英語で行われているという現状も合わさって、一国の国語でありながら消滅危機言語とされているのである。

1.2 仮説

言語とは個人のアイデンティティの形成に非常に強い影響をもたらすが、公用語・国語はさらにナショナルアイデンティティにも強い影響を及ぼす要素である。その上でゾンカ語は正確に運用できるかどうかという機能の面ではなく、ブータンの象徴としての言語という認識が国民にあるのではないかと。頻度面では民族語、有用性では英語など、フィールドによってはゾンカ語は特に便利ではないものの、ブータン国民が共通して持つ数少ない要素の一つであるため、ナショナルアイデンティティを認識するものとしてゾンカ語は根強く残っていると考えられる。ただし、いくら象徴としての言語であっても喋れる人がいなくなれば消滅してしまい、やはり時代と共に存在が英語に侵食されてしまっている事実は否めない。

そのためブータン国民がゾンカ語に対してどのような認識を抱いているのかをインタビュー調査することで、ゾンカ語がブータン国民のナショナルアイデンティティにどの程度影響を与えているのかを明らかにし、今後ゾンカ語がその他の言語に飲まれることなく国語としての地位を確かなものにすることができるのかも考察する。

2. 調査方法

本調査では、街中や訪問先で協力してくれたブータン人 11 名と DDC の職員 1 名へインタビュー

ューを行った。ブータン人 11 名にはゾンカ語への認識を問う質問を、DDC 職員にはゾンカ語の普及に向けた政策内容を中心とした質問を行ったため、それぞれのインタビュー内容を以下に記載する。すべてのインタビューは英語で行われたが、本稿では日本語で記す。

2.1 ブータン人 11 名への質問

- ①ブータン人のアイデンティティを最も強く感じるのはどの言語であるか
- ②ゾンカ語を話せることはブータン人として絶対に必要であると感じるか
- ③ゾンカ語と英語を同時に習得すること（母語が民族語である場合）にむずかしさは感じるか
- ④どのような場面でどの言語を使うか（対家族、対友達など）

表 1 インタビュー協力者基礎情報

	母語	年齢	性別	所属
A	民族語	30 代	男	JICA・NS (National Staff)
B	ロツァムカ	40 代	男	JICA・NS (National Staff)
C	ロツァムカ	24	女	日本語学校生徒
D	ゾンカ	23	女	日本語学校生徒
E	マンディ	22	女	路上インタビュー
F	ゾンカ	21	女	路上インタビュー
G	ゾンカ	23	女	路上インタビュー
H	ゾンカ	18	女	高校卒業
I	ゾンカ	18	女	高校卒業
J	ゾンカ	16	女	高校
K	ゾンカ	13	男	中学校
L	ゾンカ	60 代	男	伝統舞踊の元踊り手

2.2 DDC 職員 1 名への質問

- ①ゾンカ語をブータン国内で広めるために行っている具体的な政策は何か
- ②英語が広まっていく中で、どのように若い世代にゾンカ語の重要性を伝えていくか
- ③ゾンカ語を話せることはブータン人である上で必要不可欠であるか
- ④ブータン人のアイデンティティを形成するゾンカ語以外の要素はあるか
- ⑤ゾンカ語の国際的な地位を確立するためにどのような施策が行われているか

3. 調査結果

3.1 アイデンティティとしてのゾンカ語への意識

すべてのインタビューを通して共通していた回答は、ブータン人としてのアイデンティティを最も強く感じる言語にゾンカ語を挙げていたという点である。母語がゾンカ語の人はもちろん、母語が民族語である人々も同様の回答であった。その理由として最も多かったのは「国語だから」

というもので、他の理由として「学ぶ機会が国として設けられているから」「伝統だから」といった内容があったものの、インタビューした人の大半はゾンカ語が国語として国に指定されていることに、ブータン人としてのアイデンティティを感じると答えた。

同時にゾンカ語を話せることがブータン人としての必要条件かどうかを聞いた質問にも、大半の人が「ゾンカ語はブータン人のアイデンティティだから話せなくてはならない」と回答した。しかし一部には、

A:「ゾンカ語を完璧に習得することは非母語者にとっては難しいため、言語だけでナショナル리티を判断することはない。」

B:「自分達の世代（40～50 代）にとってはゾンカ語は絶対だったが、今の若い世代はゾンカ語よりも英語を優先しがち。でもそれも時代の流れだから仕方ない。」

L:「元々ブータンには多くの言語があり、村同士の意思疎通が図れていなかったけど、ゾンカ語があることでそれができるようになったから、今後もきちんと教育するべき。」

といった回答もあった。B の回答のように若い世代にとっては英語が重要になってきているという声もあったが、実際にインタビューした若い世代はゾンカ語をナショナルアイデンティティに重要なファクターとして挙げているため、世代を問わずブータン国民にはゾンカ語がナショナルアイデンティティを象徴するものとして浸透していることが分かった。また DDC では③の質問に対して、市場やゾン、行政手続きなどゾンカ語が話せなくては生活できない場面がブータン国内に多いため、ゾンカ語を話さなくてはという社会的プレッシャーがある程度国内にあるのではないかと話しており、現在のブータンにおけるゾンカ語の影響力はある程度存在していると考えて良いだろう。

3.2 ゾンカ語教育の障壁

上述したようにゾンカ語を重要視しているブータンであるが、その思惑の一方で特に若い世代において英語が重要視されるようになってきている。その原因は主に教育と娯楽の部分にある。そもそもブータンの学校では、ゾンカ語とブータン文学の授業以外はすべて英語で行われている。そのため現在の子どもたちは、学校においてゾンカ語よりも英語に触れる機会が多く、DDC によるとゾンカ語での教育が 2～3,000 時間であるのに対して、英語での教育は 8,000 時間に及ぶという。そのため特に母語が民族語の地域ではゾンカ語よりも英語の方が習得しやすいという意見もあり、ある程度のスピーキングはできるようになっても上級レベルには到達せず、書く能力に関してはさらに身につかないという事態が発生しているのである。この現象は、自然科学や数学などの専門科目を教えられる語彙がゾンカ語に十分でないから起きているとされていた。しかし DDC のインタビューによると、既に歴史や経済といった所謂文系科目においては、ゾンカ語で教育が施せるレベルの語彙の整備が進んでいるとのことであった。それでもゾンカ語での教育が進まないのは、それらの専門科目を教える教員が十分なゾンカ語の能力を有していないことが多いからだという。初等教育から英語で学んできた内容を異なる言語で教えるというハードルが、今の教員の前に存在しているということである。DDC としては辞書の編纂やゾンカ語教育プロ

グラムの整備、自動翻訳の作成やゾンカ語教育をより面白くするための絵本や漫画を使った教育の考案等、ゾンカ語の教育を広めるためにできることはすべて行っているため、あとは教育現場がどうそれを取り入れるかであると述べていた。そのため、長年の英語による教育によって教育現場がゾンカ語での教育に対応できなくなっているという問題が起こっていることが分かった。

また、若者の娯楽の多くが英語で提供されていることも英語の影響力を高める要因となっている。インタビューでも現代のブータン人の若者の娯楽として、TikTok やInstagram といった SNS、また韓国ドラマなどの海外エンタメが挙げられていた。街中を歩いていても英語で YouTube 動画を見ている少年たちがおり、ホームステイ先の少女たちは暇な時には韓国ドラマを英語字幕で鑑賞していると述べていた。つまり教育だけでなく娯楽の時間も英語が大半を占めているということであり、学校の授業で触れる程度のゾンカ語に比べて習得速度が早いのも納得がいく状況であることが分かった。

4. 考察

まず全体のインタビューを通して、ゾンカ語がブータン国民にとって唯一の国語として重要視されていることが分かった。しかしこのゾンカ語への認識が、果たして純粋に国民の間に形成されていったものなのか、それとも国家が恣意的に作り上げたものなのかという点に関しては疑問に思った。なぜなら、インタビューの際にほとんどの人があまり悩む素振りを見せることもなく、すべての質問に流暢に回答し、その回答内容も統一化されていたからである。日本に置き換えて考えたときに、日本人であることと日本語の関係性や日本人としてのアイデンティティについて大事なことを聞かれて、流暢に揃った回答が出揃うかといえはそのようなことは起きないように思われる。それは教育や日常生活の中に日本のアイデンティティを振り返ったり、日本人としての条件を定義化したりするような機会が少ないからだと考える。そのため、ブータンにおいてここまで多くの人の回答が似通い、ブータン人としてのアイデンティティを流暢に答えられるということは、それだけ国民の中にブータン人としての定義のようなものが刷り込まれているからなのではないか。そしてそれが行われるのであれば教育現場においてであるため、ブータンの教育がどのようにブータンアイデンティティを国民に浸透させているのかという点をさらに深めたいと考えた。

また DDC と教育現場の意識が乖離している可能性も今回の調査で明らかになった。DDC において、できることはすべてやっているからあとは教育現場の問題だという内容の発言があったが、DDC が目指そうとしているゾンカ語の在り方と教育現場で実際に実現可能なゾンカ語教育に大きな隔たりがあるように感じられた。なぜなら国家として持つゾンカ語の理想の在り方を実現するために必要な行動が、実際には教育現場においてあまり取られていないからである。例えば教員養成の段階でゾンカ語教育を必須にして、歴史などの科目をゾンカ語で教えられるようにしたり、DDC の提供する絵本などを通したゾンカ語教育プログラムを取り入れたりなどといった、ゾンカ語をもっと広めようという動きが教育現場において少ない。この状況には、前述したように既に教育現場において英語教育が常態化してしまい、ゾンカ語教育に置き換える余地がないといった状況に加え、国家の象徴としての言語という意識が強いことも原因として挙げられると考えた。多くの人が「アイデンティティだから学ばなくてはいけない」と答えたことから分かる

ように、多くの国民はゾンカ語を有用性の高いコミュニケーションツールとしてよりも、アイデンティティの1つとして見ているのである。そのため、積極的にゾンカ語の能力を高めようという意識が生まれにくく、象徴的な意味合いの言語として生活に必要な最低限の能力を身につければ良いという認識が生まれているのではないかと考えられる。

当然、現段階では国家公務員や国家の要職に就くにはゾンカ語は必要不可欠であり、仏教や伝統を通じたブータン人の強い自国愛もスタディツアー中に強く感じたため、ゾンカ語が今すぐに消滅するということは考えにくい。一方で、これからますますグローバル化していく国際社会の中で、英語能力に長けた若い世代が国家運営に携わるようになった時、その状況がどのように変化するのは未知である。国家運営の重要な部分が英語に置き換わり、ブータン国民のアイデンティティとして形式的に残存していくという未来も考えるだろう。世代が変わる時にナショナルアイデンティティとしてのゾンカ語にどのような変化が起こるかを今後も観察していきたい。

5. 感想

今回のスタディツアーでは、ナショナルアイデンティティという大きな概念がテーマに関係していたため、事前学習の段階からブータンを伝統や日本と異なる点、特徴的な文化を通して知ろうとしていた。しかし実際にブータンに赴いて現地の人と話す中で、そのフィルターをかけた見方では本当のブータンを見ることは難しいということに気づいた。なぜなら特に若い世代の間で、韓国ドラマが流行していたり、海外留学志向が高まったりしていることから分かるように、ブータン国外の人間がブータンへ抱く「秘境」というイメージとはかけ離れた生活が、既にブータンにおいて一般化しているからである。ブータン人が仏教や伝統文化を大切に、日常生活の中にも取り入れていることは事実であるが、それと同時に日本に暮らす私たちと生活スタイルが変わらない部分も多く、事前調査段階では必要以上にブータンという地を遠いものとして捉えていたことを実感した。この気づきは実際に現地に行き、ホームステイをしたり現地の人に話を聞いたりすることができたから得られたものであり、ただの旅行では得られなかったものである。そのため、今後も研究を行う時にはフィールドワークやインタビューといった手法を用いながら、より深い考察が行える研究を目指したい。

6. 参考文献

- 佐藤美奈子 (2021) 「多言語社会ブータン王国における複言語話者の母語認識」 言語科学会『Studies in Language Science』19 巻、pp.85-92.
- 佐藤美奈子 (2020) 「多言語社会ブータン王国における教授言語—選択基準としての「平等性」と「アイデンティティ」—」 社会言語科学会『社会言語科学』23 巻 1 号、pp.162-177.
- BBS (2023.2) “Making Dzongkha curriculum interesting as well as challenging – BBS” (<http://www.bbs.bt/news/?p=181415> 最終閲覧：2023 年 2 月 24 日)

ブータン国民におけるナショナルアイデンティティの実態

文教育学部人間社会科学科 1年

リップル アメリ

1. 調査のテーマ

本稿では、ブータンの人々のナショナルアイデンティティについて質問項目を設定し、現地調査で得られた解答から国民のナショナルアイデンティティの実態を分析する。

大国に挟まれた小国の立場において、ブータン人としてのナショナルアイデンティティの確立は国家安全保障政策であった。隣国シッキムはネパール系住民の人口増大を引き金に 1975 年に滅び、インドに併合された。ブータンでは 79 年にゾンカの国語化、公の場でのゴ・キラの着用や、建築物に伝統的デザインを取り入れる伝統文化保護政策が打ち出され、80 年代後半に入って義務化、徹底されるようになった。99 年に発表された、第 4 代国王の戴冠 25 周年を記念する長期開発要綱「ブータン 2020：平和、繁栄と幸福のためのビジョン」では、指導方針の 1 番目にブータン人としてのアイデンティティの確立が掲げられ、固有の文化的アイデンティティによる求心力が、国の独立、主権、安全保障に直接結びつけて説かれている（根本 2012, pp.44-46, 61-62）。

ブータンのナショナルアイデンティティ政策は現代のナショナリズムである。中川（1996, p.9）によるナショナリズムの定義を用いると、ナショナリズムとは、「今まで、自分が『国民』であることを、『民族』であることを知らなかった人々が、他からそう呼ばれるにせよ、自ら呼ぶにせよ、新たなアイデンティティを得、そして、新たな『目的的な』行為（たとえば、『愛国的な』行為）の可能性を示される」ことである。ブータンの人々は、母語や文化の違いに関係なく一様に「ブータン人」のアイデンティティを得、ゾンカの学習、ゴ・キラの着用、国王・国家・国民に仕えることを求められるようになった。

ナショナリズムでは、関係の物象化、属性（内包）の物神化、外延の物象化、外延の物神化、外延の物神化の 4 つの事象が複雑に絡み合い、ネイションを構築する。関係の物象化とは、王と臣下の関係から王という属性を導くように、関係が属性に化けることである。属性（内包）の物神化とは、本来、属性は存在するものではないが、元が存在するのと同じ資格で属性が存在するとされることである。物神化とは、「存在する」とは言えない対象が「存在する」と言われるようになることであり、その存在自体が人々に神秘性を感じさせるようになる。例えば、「〇〇は日本人である」と言うことはできるが、「日本人」という属性は本来存在しないため、「日本人とはこれこれこういう性質を持った人である」と言うことはできない。外延の物象化とは、外延が内包に化けることであり、A に属す、B に属すという名付けによって（内包）属性を導くことである。外延の物神化とは、外延が元の存在の仕方と同じ仕方で存在するとされることである（中川 1996, pp.64-68）。これらのメカニズムによって、あたかもそれが元から存在していたかのように扱われ「ネイション」は構築され、「ブータン」が構築された過程も同様である。

2. 調査設問

質問項目は、日本の学校教員を対象にナショナルアイデンティティの調査を行った高橋（2018,

p.569) の質問項目を参考にした。以下が質問項目である。現地調査では、回答者に直接英語で聞き取りを行う場合と、通訳を介して聞き取りを行う場合があった。

(1) What do you think are the necessary factors to be a Bhutanese?

(ブータン人であるために必要な要素は何か)

(2) Is it necessary to be able to speak Dzongkha?

(ゾンカを話せることは必要か)

(3) Is it necessary to wear Gho or Kira?

(ゴ・キラを着用することは必要か)

(4) Is it necessary to believe in Buddhism?

(仏教を信仰していることは必要か)

(5) Is it necessary to live most of your life in Bhutan?

(人生の大半をブータンで過ごすことは必要か)

(6) What do you like about people of Bhutan?

(ブータンの人の好きなところは何か)

高橋 (2018, p.569) の調査では国籍の有無や血統に関しても質問項目に含めていたが、今回の調査ではブータンの国籍法で定められている項目については質問しなかった。質問項目(3)については、ゴ・キラを着用する頻度も合わせて質問した。

3. 調査結果

合計で 20 名の回答が得られた。以下の表がその一覧である。空欄は不明な箇所である。

表 1 回答者一覧

	場所	年齢	母語	補足
a.	JICAブータン事務所(ティンプー)			
b.	JICAブータン事務所(ティンプー)			
c.	伝統技芸院(ティンプー)		シャシヨツプ	
d.	伝統技芸院(ティンプー)		ケンカ	
e.	伝統技芸院(ティンプー)		ケンカ	
f.	伝統技芸院(ティンプー)	21	ケンカ	
g.	日本語学校(ティンプー)	24	ローツァンパ	
h.	日本語学校(ティンプー)	23	ゾンカ	
i.	日本語学校(ティンプー)	31	ゾンカ	
j.	クロックタワー付近(ティンプー)	22、24、22	ゾンカ、マンディプカ、ゾンカ	
k.	ペンテコステ派の教会(ティンプー)	36	ローツァンパ	
l.	プナカ・ゾン付近の小売店(プナカ)	63	ゾンカ	ラヤのかた

m.	トーザ川遊歩道(ブンツォリン)	15	シャシヨツパ	
N	トーザ川遊歩道(ブンツォリン)	32	シャシヨツパ	
o.	国境ゲート前のベンチ(ブンツォリン)	71	シャシヨツパ	
p.	国境ゲート付近の小売店(ブンツォリン)	27		
q.	滞在中同行してくださっていたガイド	36	ゾンカ	
r.	ホームステイ先(パロ)	77	ゾンカ	
s.	ホームステイ先(パロ)	18	ゾンカ	
t.	RAPA元団員	62	ゾンカ	

回答内容をそれぞれまとめたものが以下である。項目(1)の回答内容がその後の項目の解答を含んでいた場合、すでに回答が得られた項目は省いてある。質問できなかった等の理由でその項目の解答が得られなかった場合、空欄になっている。筆者の注釈は（ ）内に記した。

a. (1)ブータン人の歴史的な背景、ゾンカ (3)必要、若い世代にもより頻繁に着てほしい (4)必要 (5)人によって事情は変わる、若いうちにより良い生活を求めて外国に行くのは良いが国に貢献するために最後は国に戻るべき (6) (質問がやや異なる、「ブータンの人の特徴は何か」) 親切で困っている人がいると助けること

b. (1) (国籍法からの観点) (2)必要 (3)必要、時代によって変化しているため公の場以外では着なくても良い (4)信仰の自由がある、人口の大多数は仏教 (5)ブータンに住むのが好ましい、一度離れても最終的には戻るべき (6) (質問がやや異なる、「ブータンの人の特徴は何か」) 落ち着いている、values を持っている、頼り甲斐がありフレンドリーなこと

c. (1)伝統衣装を着る、ゾンカ、GNH について知っている (3)義務の場所のみ (4)必要 (5)外国に触れることも大切 (6)優しい心、平和、GNH を理解していること

d. (1)ゾンカ、文化に従う、ゴ・キラを着る、ルールを守る (3)義務の場所のみ (4)必要 (5)外国に出て発展した科学技術を見ることは大事 (6)信仰があること

e. (1)きれいな心 (2)必要 (3)義務の場所のみ (4)必要 (5)一番はブータンに長く住むこと (6)

f. (1)勤勉でよく働く、伝統文化に従う (2)必要 (3)義務の場所のみ (4)必要 (5)個人による (6)他の国と違って文化を守っていること、勤勉なこと

g. (1)優しさ (2)必要 (3)義務の場所のみ (4)絶対ではない、他にも多くの宗教があり今はキリスト教が多くなってきている (5)市民権を持っているなら必要はない (6)親切で優しく時間に

柔軟なこと

h. (1)わからない (2)必要、自分の国の言語は重要 (3)義務の場所のみ (4)必要 (5)ブータンを離れても良いが忘れてはいけない、他の国の市民権を得た人を見ると悲しくなる (6)

i. (1)善悪の価値観、人間的、自分よりも周りの人たちを一番に考える、シンパシーとエンパシーを持った良い人間存在 (2)必要 (3)必要 (4)強制することはできない、良い人間存在なのであれば仏教を信仰していなくても良い (5)必要はない、外国で暮らしても良い、ブータンの心が一番大事 (6)

j. (1)わからない (2)勉強すべき (3)義務の場所のみ (4)必要 (5)必要はない (6)一体感

k. (1)国王・国・国民に仕える、より良いことのために祈る、文化を守る (2)必要 (3)毎日着る、若い人はあまり着ないがもっと頻繁に着てほしい (4)国王は 3 つの宗教があると言った (5)必要、国の未来を憂えるべきではない (6)

l. (1) (2)ゾンカが一番大事、コミュニケーションが取れなくなる (3) (ラヤの伝統衣装を着ていた) 若い人はゴ・キラを着る (4)毎日お経を唱える (5)自分はどこにも行けないが若い人は行った方がいい (6)大変な時に助けてくれること

m. (1)無回答 (2)必要 (3)義務の場所のみ (4)必要 (5)必要 (6)尊敬の心

n. (1)アイデンティティを示すこと、ゴ・キラ、ゾンカ (2)必要 (3)土曜日と日曜日は (4)必要 (5)必要はない (6)謙虚さ

o. (1)心がきれい (2)自分がゾンカができない (3)私は毎日着るけど若者は着ない、人によるからいい (4)私は毎日お祈りする (5) (6)仏教とお祈り

p. (1)ゾンカが上手に話せる、文化を知っている (3)仕事の時は必要、他の日は良い (4)重要 (5)id カードを得るのは大変 (法律の観点から述べてくれた) (6)助け合い、優しさ、シンプルな暮らし

q. (1)考え方が一番大事、ブータンの文化をわからないといけない、親がしてきたことを知らなければブータン人がなくなっていく、伝統文化をつなげる (2)国語であり学校でもゾンカを学ぶ、母語ができない人が増えているが母語を忘れてしまったら元の考え方も失われる (3)必要、仕事では着るが日常は普通の服 (4)大体の宗教は良い宗教で宗教の違いはどうでもいい、フォロワーが宗教を悪くしてしまう、宗教の自由はあるが昔からつなげてきたものだから親の宗教を続けて守ることが大事、自分が一番と思うのは仏教に反するから他の宗教も悪いと思わないのが一番良

い (5)私はずーっと住みたい、どこに行ったとしてもブータンの文化を守ることが重要 (オーストラリアのミニブータンの事例)、心がブータン人であればどこに行ったとしてもブータン人である

r. (1)代々文化を受け継ぐ、お坊さんを守る (2)すごく大事 (3)自分の昔からの衣装を守らないといけない、(若い人に対して) 義務の場所で着ていれば普段は別に良い (4)仏教はみんな信じなければいけない、時間があれば瞑想に行きなければお祈りをする (5)必要はない (6)お祈りするところ、みんな仏教が好きなところ

s. (1)ナショナルアイデンティティ、ゴとキラ、ゾンカ (2)ゾンカは絶対ではない、さまざまな言語があるため自分の言語を話せば良い (3)着るのは時間がかかり働きづらいので義務の場所のみ (4)必要 (5)必要はない、その国のルールに従い違う国籍を持っても良い (6)優しさ

t. (1)尊敬の気持ち、困っている人たちをすぐに助ける、良い考え方を持つ、伝統文化を守る (2)元々言葉がそれぞれ違って地域間のつながりがなかったが、今は国が定めてくれて繋がりができたので大切にしなければならない (3)田んぼ仕事のとき以外は毎日着ている、(若い人に対して) 個人の幸福もあるので絶対着なければいけない決まりは良くない、今のように公的なところだけで良い (4)絶対に仏教でなければいけないわけではないが基本は仏教、仏教が優れているのは前世・来世を考えて良いことができるから (5)人生は半分寝て半分食事をして終わる、ブータンはそんなに頑張らない、外国に行ってしまうと欲が出てブータンで満足できなくなるからブータンにずっといた方が良い、あるものを探すとないものが見つかる

回答の傾向を見ていく。(1)はゾンカ、ゴ・キラ、伝統文化など表出的で具体的な要素を挙げる人と、勤勉さや優しさなど精神面を挙げる人、その両方を挙げる人がいた。10代、20代の回答者はわからないと答えたり、形式的に答えたりする傾向が見受けられた。(2)はゾンカを話せないo.と、個人がそれぞれの言語を話せば良いと答えたs.以外、全員が必須と捉えていた。(3)は義務付けられた場所では必須と全員が答えた。若者(回答者では18-36まで)は義務付けられた場所以外では着用しないと答えたが、それより年上の回答者は毎日着用すると答え、若者にもっと頻繁に着用してほしいと答える人もいた。(4)は6人を除いて必須と答え、その6人の中でもキリスト教徒のk.とキリスト教について述べたg.を除いては、仏教を基本に置いていた。(5)は非常に多様な回答が得られた。理由は特に言及せず必要、必要ない、あるいは理由を述べて必要、逆に外国に触れた方が良いという回答もあった。(6)は優しさ、勤勉さ、仏教の信仰心、良い人間存在としての精神面・道徳を挙げる回答が多かった。全体を通して、一問一答のように形式的で固定化された回答の仕方をする若者に対して、年齢が上がるほど理由や論理が構築された回答をする傾向があった。

4. 考察

高橋(2018, pp.569-573)が用いたナショナルアイデンティティの4分類を参考にする。高橋

は、生まれた国、人生の大部分、宗教、先祖を民族的ナショナルアイデンティティ要素、言語、法律を市民的ナショナルアイデンティティ要素として定義し、ナショナルアイデンティティを「民族のかつ市民的 (civic)」、「市民的 (civic)」、「民族的」、「どちらでもない」の4つに分類した。

質問項目の回答で得られた結果から民族的要素を見ていく。質問項目(4)で必要と回答するのみならず、(1)でも要素として挙げるなど、仏教は共通して非常に重要な要素として考えられていた。一方で質問項目(5)人生の大半をブータンで過ごすべきか、に強い傾向は見られなかった。現在のブータンの出生における国籍付与条件は85年国籍法に遡り、両親がともにブータン国民である必要がある(根本 2012, pp.79-80)。質問項目に生まれた国、先祖は含めなかったが、法律で上記のように定められている以上、国民の意識としてブータン人を規定する要素に「両親がブータン人である」民族的要素があると考えられる。

続いて市民的要素を見ていく。質問項目の回答者の母語も多様だったように、自らの母語が別に存在する上で国語としてゾンカを学ぶケースが多いため、ゾンカが話せることは市民的ナショナルアイデンティティの要素と考えて妥当である。ゴ・キラの着用は文化的・民族的な要素も強いが、義務であるため着用する場合も踏まえると、法律に従うという市民的ナショナルアイデンティティの側面も存在する。普段から自主的にゴ・キラを着用していた年配の世代に比べて、義務化された場所でのみゴ・キラを着用すると答えた若者世代では、特に市民的ナショナルアイデンティティとしての性格が強い。

回答で多く挙げられていた、勤勉さや優しさなどの精神面の特徴は、文化的・民族的なナショナルアイデンティティに含まれる。

以上のように、ブータンにおけるナショナルアイデンティティでは、民族的な要素と市民的な要素がどちらも顕著に見られた。民族的要素においては仏教が大きな役割を果たしていた。

5. 調査に参加した感想

バンコクでのトランジットで宣言した目標は「自分の価値観をガラッと変えてくれるような経験をする事」だったが、ブータンでの日々はまさに人生が変わるような経験だった。毎日が新しい発見で、調査項目のナショナルアイデンティティや宗教に対してのイメージがガラッと変わり、豊かさとは何か、伝統とは何か、幸福とは何か、といったさまざまな問いが今でも頭の中をぐるぐると渦巻いている。ただ1つわかるのは、考えることを放棄した幸せが存在する中で、私は思考せずに楽しく生きるより考えて悩んで苦しんで死んでいきたい。

6. 引用文献

高橋史子 (2018) 「誰を『日本人』らしいとみなすのかー多文化社会におけるナショナルアイデンティティと教員ー」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第58巻、pp.563-582.

中川敏 (1996) 『モノ語りとしてのナショナルリズム 理論人類学的探求』金子書房。

根本かおる (2012) 『ブータン 「幸福な国」の不都合な真実』河出書房新社。

「幸せの国」ブータンの国家政策と国の発展について

理学部生物学科 1年

鈴木 満央

1. 調査テーマ

ブータンの政策には、「幸せの国」ブータンであるための4本の柱（「持続可能で公正な社会経済開発」「環境の保全」「文化の保護と振興」「良い統治」）がある。例えば、「森林は国土の6割以上でないといけない」という政策により、実際に国土の70%が森林、26%が国立公園と自然保護地区となっている。これは経済発展のための開発よりも、環境の保全を重視した政策である。この政策によって国土の使用が制限されたことで、インフラ整備や工業化が進まないというのが現状だ。また、伝統的な宗教としてチベット仏教が実質的な国教に指定されている。チベット仏教では、輪廻転生して次の生に生まれ変わるため、生きとし生けるものすべての幸せを願い、殺生を極力さけるという教えがある。この政策によって、農薬の使用があまりすすめられなかったり、野犬の殺処分が行われなかったりしている。農薬を使わないことで野菜が高くなり、インド産の安い輸入品に負けたり、野犬対策が行われないことで狂犬病がなくならなかったり、子どもが事故に遭ったりしている。このように、「幸せの国」ブータンとしてのアイデンティティを保つための政策が、国の発展を妨げてしまっている。スタディツアーを通して、これらの国家政策の矛盾に関して、両者のバランスを保つにはどうすればよいのかについて考えていきたい。

2. 調査設問

国家政策の矛盾について、「幸せの国」ブータンとしてのアイデンティティと、国の発展のバランスを保っていくにはどうしたらよいのだろうか。

3. 調査結果

3-1 野犬に関して

野生動物には餌やりをしないよう呼びかけたり、インドとの国境付近ではインド側の管理が悪く野生動物が入ってくるため、危険だという警告を促したりしているという。また、野生動物を売ることも禁止している。

そして現在、ブータンの首都ティンプーでは、野良犬プロジェクトが進められている。手術によって野良犬の繁殖を抑える政策をとっているため、2、3年後には野良犬が減ると想定されている。実際に最近では、数年前よりも野良犬が減ったことで、夜が静かになったという。しかし、この野良犬プロジェクトによって野良犬が減ることで、他の野生動物が街へ出てくるのではないかと懸念されている。既に、インドからくる象に家を壊されるという被害が多発していたり、ベンガルトラが標高4,000mの地点まで来ていたりする。

3-2 オーガニックに関して

近年では、ブータンでも農薬の使用が増えてきている。しかし使用量は少なく、オーガニック

を目指した農業が行われている。ブータンがオーガニックを目指す理由は、健康のためと、チベット仏教で虫を殺さないという教えがあるためである。

政府による政策の一環として、すべてオーガニックでの栽培が定められた地域がある。そこでは、お米、小豆、唐辛子などが、政府のサポートのもと栽培されている。またパロには、日本のプロジェクトでオーガニックのお米を栽培している地域もある。

今の1番の課題は、オーガニックの作物でもそうでなくてもすべて同じ値段である、ということだ。これは、国民がオーガニックに関して理解していないため、オーガニックの作物を高く売っても売れないからだ。圧倒的な時間と手間がかかるにも関わらず、収入は同じとなると、オーガニックでの栽培を継続するのは困難だ。

さらに、輸出をする際に、オーガニックの認証を得ることが難しいという点も課題である。例えば、ヨーロッパにレモングラスを輸出する際、EUのオーガニックの認証を得るためには、EUの専門家をブータンに呼ばなければならない。すると、人件費や輸送費がかかってしまう。また、米国にはNOP（National Organic Program）というオーガニックの認証機関があり、ブータン国内でオーガニックとされているだけでは、米国ではオーガニックとして扱ってもらえない。

これらのことから、オーガニックに関する教育を推進し、国民の理解を得ることと、オーガニックの認証を得るための仕組みを整備することが、今後のオーガニックの推進に不可欠であると考えた。

3-3 高地牧畜民の方々からのお話

まず、ラヤの高地牧畜民の63歳の女性からお話を聞くことができた。夏は4,000mの地点（ラヤ）で生活をしている。山にはヤクが約60頭おり、乳搾りなどをして生活をしている。冬はプナカで、夏に備えてお米の栽培をしている。山では農薬を使わないが、プナカでは使っているという。また、プナカでは田んぼにテントを張って生活している。移動は馬8頭と共に行い、昔はラヤの村まで2日間かかっていたのが、今では半日で行くことができる。昔はたくさん雪が積もっていたが、今は地球温暖化の影響で積もらないという。私は、環境問題がラヤにも及んでいることに危機感を持った。ラヤの言語はゾンカ語で、チベットから買ってきた羊毛でできた服を着ている。触らせてもらったが、厚みと重みがあつて、保温効果がありそうだと感じた。また伝統的な帽子をかぶっていて、私も被らせてもらった。現在それを作る人は1人しかいないそうだ。仏教を信仰しており、毎日お経を唱えているという。ブータンの人は病気など大変な時に助けてくれるところが好きだそうだ。

次に、ルナナの高地牧畜民のかたから話を聞くことができた。ルナナは映画『ブータン 山の教室』（Lunana: A Yak in the Classroom）の舞台となった地だ。ルナナの人々は比較的裕福であり、ルナナ＝プナカ間もヘリで移動するという。ヘリは4人乗りでチャーターすると片道5万2,000Nu（約8万3,200円／1Nu＝1.6円で計算）らしい。今（2月10日）はプナカに来て4ヵ月経っていて、もうすぐ行われるお祭り（プナカ・ドムチェ）を見てから帰るという。昔はルナナへ歩いて1週間かかっていたが、近年はヘリを使うことができるため楽になったそうだ。ルナナが裕福な理由のひとつに、冬虫夏草がとれるということがある。裕福であるため、プナカでもアパートを借りて住んだり、家を買ったりする人が多い。

4. 考察

私がブータンに来て1番考えたことは、「発展途上国ってなんだろう」ということだ。発展途上国とは「経済発展や開発が遅れ、経済成長の途上にある国」のことであるが、私はその定義に加え、「貧しい」「不衛生」などという勝手な先入観を抱いてしまっていた。しかし、ブータンで様々な人と交流したり文化を経験したりする中で、ブータンに対するイメージが180度変わった。特に、ブータンは精神的な豊かさで溢れていると感じ、発展の度合いと精神的な豊かさは比例するわけではないのだという確信を持った。そこで、ブータンの精神的な豊かさは何によって生まれたものなのかについて考察し、大きく分けて3つの点にまとめた。

1 つ目は、ブータンの人々は、心の底から国を愛しているという点だ。インタビューをする中で、ブータンの人々は、自国の政策に誇りを持っているように感じた。それに対して、日本は先進国であるが、自国の政治に誇りを持っている人は多くないのが現実だと思う。私自身も、日本の政策に対して、内容より形式や表面的な見栄えを重視し、優先していると感じることが少なくない。ブータンが「幸せの国」と言われるのは、内容を重視して立てられた政策のもと、国民がそれに心から納得し、国全体が皆同じ方向に向かって進んでいるからなのではないかと考えた。さらに、インドへの対抗心から生まれる団結力も、ブータンの人々の愛国心を強めていると考えた。インドなくして成り立つことのできないブータンであるが、日常のふとした場面からインドへの対抗心を感じた。例えば、スーパーで「ブータン産のものはとても美味しいけど、インド産のものは美味しくないよ」という言葉を何度も聞いた。また伝統技芸院を訪問した際、生徒がインド人観光客を見つけると「君たち日本人は大人しくて上品だけど、あの人たちは好き勝手歩き回ってみっともないね」というようなことを言われた。野生動物についてインタビューした際には、「ブータンの野生動物はしっかりと管理されているからブータン発の感染症はないけど、インドとの国境付近は、インドの管理が悪いせいで汚い野生動物が入ってくるから気をつけた方がいい」という話を聞いた。そしてブータンの人々は、インドから出稼ぎにくる人々を見下しているという話も聞いた。どれも私からインドに関して触れたわけではないのに、ブータン人でもインド人でもなく日本人である私に言うてくることに、インドへの強い対抗心を感じた。こうした対抗心が、ブータンとしての結束力を導き、よりブータンへの愛国心を強めるのではないかと考えた。

2 つ目は、チベット仏教への信仰が強いという点だ。チベット仏教の教えでは、1番良いのは人間の世界とされ、来世再び人間の世界、そして仏教のある世界に生まれたいという思いから徳を積むという。そして欲は良くないものとされ、現状に満足せず、さらなる幸せを求めると苦しみが生まれるという話を聞いた。この教えから、ブータンの人々は、当たり前の日常を送れることに日々感謝して生きている。今足りないものを追い求めて生きるよりも、今あるものに感謝して今を大切に生きる方が、精神的な豊かさが得られるだろう。そして徳を積むため、利他的な思考を軸に生きている。私も現地での交流を通して、ブータンの人々は皆優しく思いやりがあり、誰に対しても親切で、家族のような温かさで包み込んでくれるという印象を持った。家族以外の人とも家族のような深い関係を築いていて、よく笑い、時にはお互いに助け合い支え合える関係は、精神的な安定に繋がるだろう。また食事に関する習慣も、精神的な豊かさの鍵となっていると考えた。食事の前に1時間ほどお話しする時間を設けたり、家族皆で円になって食事をしたり、

満腹になるまで食べたり、食後にお茶の時間を設けたりなど、食事にしっかりと時間をかける点が印象的であった。

3 つ目は、異文化との交流が少なかったという点だ。ブータンでは、服装や建築様式、食事、宗教、言語、音楽などの伝統文化が、現代でも当たり前のように生活に溶け込んでいる。それに対して日本では、伝統文化が現代の生活に浸透している場面が少ない。この違いは何によって生じたのかを考えたところ、「異文化との交流」であるという結論に達した。そして、ブータン人としてのアイデンティティや、ブータンの穏やかさは、異文化との交流の少なさによって保たれてきたものなのだと考えた。異文化との交流があると、選択肢を持つようになり、決められた1つの道を進まなくなる。また、交流があると競争が起こり、穏やかでなくなる。私は、ブータンの人々がブータン人としてのアイデンティティは何かと聞かれた際に、何かを即答できるという点に感動した。私の場合は、日本人としてのアイデンティティは何かと聞かれても、すぐに答えることができないし、考えても分からない。これは、日本がたくさんの交流によって異文化を取り込んだ結果、日本だけの伝統が消えていったからだと考えた。他の先進国でも同じような現象が起きていて、交流によってその国の伝統やアイデンティティが消え、世界が統一化されているように感じる。近年はブータンも、SNSの普及によって異文化との交流が盛んになり、今までの伝統やアイデンティティとは違った形になってきている。実際に、オーストラリアへの頭脳流出問題は、ブータンに残ることよりも経済的な方を選んだ結果であるし、ホームステイ先の女の子が、伝統舞踊を踊っているときよりも、K-POPを踊っているときの方が目を輝かせていた光景から、ブータンも変わってきているのだと実感した。また、インドとの国境に接しているプンツォリンでは、ティンプーやプナカ、パロなど他の地域にはない雰囲気と多様性を感じた。これらの経験から、先進国は、他国との交流や競争をしたり発展したりする中で、その国にとって大切なものをたくさん捨ててきたのだと考えた。そして、無知であるからこそ守られていくものがあるのだと実感した。

最後に、この研究のリサーチクエスションについて考察したい。このスタディツアーを通して、発展途上国の定義を決めたのも、発展途上国と決めつけているのも、先進国であるということに気付かされた。そしてブータンの人々は、ブータンを発展途上国だと思っていないのではないかと考えた。先進国は、経済的に発展した結果であるだけで、国としてのアイデンティティや精神的な豊かさにおいて、最も優れているわけではないのだと考えるようになった。何が正解で何が間違いであるという決まりはなく、それぞれの国が何を重視するのか、ただそれだけの違いなのだと思う。今先進国と呼ばれる国々のように、経済的、工業的に発展することだけが正解ではなく、優劣があるわけでもない。これらのことから、ブータンの政策が矛盾しているのではなく、経済的な発展のみが進むべき道だと思い込んでいた私の認識が間違っていたのだと気付かされた。同時に、国際協力のあり方についても考えさせられた。優劣関係で捉えることをやめ、お互いを尊重しあうことが前提として必要だと考えた。そして先進国が一方的に考えを押し付けるのではなく、先進国と発展途上国が共に成長していくという形が、本来の国際協力のあり方なのではないだろうか。

5. 調査に参加した感想

最初は、発展途上国に興味があつてスタディツアーに参加したため、ブータンに特別こだわりを持っていたわけではなかった。しかし、最終日に車窓から最後のパロを眺めていたら、ブータンでの思い出がたくさん込み上げてきて、ブータンから離れるのが寂しくてしょうがなかった。気づいたらブータンが大好きになっている自分がいて、「幸せの国」ブータンは、訪れた人を幸せな気持ちにしてくれる国でもあるのだと思った。そしてブータンに来たことで、自分の中にあった先入観や偏見を改めることができ、人生観や世界の見え方も変わった。

また、研究以外での個人的な目標として「出会いを大切にする」という目標があつた。この機会を通して出会えた、ブータンという国、現地の人々、そしてツアーの仲間たちと先生がたに心から感謝している。これらの出会いは一生の財産だと思うので、今後も大切にしていきたい。

そしてこのスタディツアーで、「どこかの発展途上国」ではなく、「幸せの国」ブータンを訪問できて本当に良かった。

6. 参考文献

『地球の歩き方』編集室編 (2018) 『地球の歩き方 D31 ブータン 2018～2019 年版』ダイヤモンド社。

“幸せの国” ブータンにおける “不幸せな” ごみの不法投棄と国民の衛生意識

文教育学部人文科学科比較歴史学コース 2年

安藤 承子

1. 調査のテーマと先行研究

1-1 調査のテーマ

本調査は、国民総幸福量の最大化を政策の根幹に据えるブータンでなぜ生活環境におけるごみの不法投棄が後を絶たないのかという問題意識に端を発し、特にブータン政府の政策や JICA の事業を前提に、国民の衛生意識がどの程度形成されてきたのか、またそれが現実の衛生環境状態にどの程度表出しているのかについて調査しようとするものである。

今回は、2023 年 2 月 8 日から 2 月 15 日のブータン訪問に際して、訪れた 4 都市（ティンブー、パロ、プナカ、プンツォリン）における住民に対するインタビュー及び街の散策を通じた調査を行う。また、JICA ブータン事務所ならびにティンブー市役所のご厚意により、各担当者に対してティンブー市のごみ問題に関するインタビューを行うことができた。

1-2 先行研究・事業

はじめに、これまでブータンで実施されてきたごみ問題に関連する政策や事業について言及する。かつてより、ブータンでは廃棄物処理体制の整備が不十分なことに起因する公衆衛生状態の悪化や、急激な人口増加に伴うごみの増加及び最終処分場整備の立ち後れが深刻な問題となっていた¹。JICA 事務所のホームページによると、こうしたブータンの廃棄物処理に係る対策事業として、JICA 草の根パートナー型事業で 2 回（2013 年～2016 年…a、2017 年～2021 年…b）、無償資金協力で 1 回（2020 年～2022 年…c）実施されてきたという²。また、a の事業実施期間中の 2014 年に報告された、大澤正明「ブータン王国ティンブー市における環境・ごみ問題世論調査」³では、ティンブー市における環境やごみ問題に対する住民の意識が統計的に提示された。特に注目すべきは、「環境対策への関心」の項目において、回答者の 85%が「GNH は身の回りの清潔や美観と結びつく」と認識している点であり、著者は「環境対策が GNH の向上に不可欠な要素であるということが国民に深くいきわたっている」と結論付けている⁴。さらに、「身近な環境問題を解決する」方法として、「清掃活動を実施する」ことに 60%という高い関心を示していることも明らかになり⁵、総じて 2014 年時点の報告に基づくと、ブータンでは政府主導の GNH 政策が、人々の生活や精神的豊かさの指標に一定の影響を与えているように思われる。

この過程を踏まえて b・c の事業に注目すると、最近の事業の傾向は、既存の最終処分場の整備や新しい収集車の提供に加え、市民全体を対象にした環境教育・啓発活動等の推進が徐々に割合を占めるようになっていくことが分かる。特に b の事業内容には、大きく 3 つにカテゴライズされたうちの 3 つめに、「行政・学校・民間企業が連携し、市民を対象にした環境教育体制が整う」ことを目標にした活動内容が特筆されており、この点は大澤が 2014 年の報告で示した問題意識が反映されているものと見るができる⁶。よって、住民に対する環境・ごみ問題の意識付けが現状のごみ問題を解決する上で重要な要素になることは明らかであり、国民の有するモチベーシ

ョンからも、ブータンは比較的環境・ごみ問題の政策が遂行しやすい土壌にあるかといえる。

以上、先行研究及び事業から、ブータンの環境・ごみ問題は主に廃棄物処理システムに関する対策が施されてきたこと、同時に環境教育を取り入れながら国民の衛生意識向上を図ろうとしてきたことが分かる。しかし、実際のブータンではごみの不法投棄・ポイ捨てが後を絶たないという事実が問題となっているため⁷、この矛盾を生み出す要因も合わせて本調査で考察していきたい。

2. 調査設問

調査方法（3通り）及び設問は下記の通りである。

I) インタビュー

Q1. 衛生環境について、あなたが個人的に責任を持つべきだと思う範囲は

①家の周辺まで ②近隣付近まで ③街の広場まで ④その他

Q2. 現在、あなたの街のごみ問題の状態（程度）についてどのように感じるか

Q3. ごみ問題についての情報は、主に

①政府や行政から ②民間の収集会社から ③マスメディアから ④学校
⑤僧院 ⑥その他

Q4. 現在、ブータンではごみ問題を意識した国家的な取り組みや目標が…ある or ない

→（あると認識している場合）具体的に説明を求める

Q5. 街路や川、裏通りなどにごみを捨てる人がいる理由（＝不法投棄）についてどう考えるか

Q6. ごみ問題を解決するためにあなたが重要だと考える要素は

①国や政府の政策 ②自治体の働きかけ ③民間業者の機能 ④国民の意識 ⑤その他

Q7. （ティンプーのみ）ドロップインセンター⁸を利用したことが…ある or ない

II) 街路散策

ごみの不法投棄やポイ捨てが多い場所を特定し、そのごみの種類を調査する。

III) 公的機関（JICA ブータン事務所・ティンプー市役所）への取材

Q1. 2017 年から 2021 年まで、市民全体で廃棄物処理対策に取り組むための環境教育が幅広く展開されてきた⁹というが、実際にこの事業を通してどのくらい環境教育が普及したのか

Q2. 「2030 年までのゼロ・ウェイストの実現」に向けて、特に力を入れている事業や政策は何か

Q3. 「ゼロ・ウェイスト・アワー・イニシアティブ」¹⁰の規定は、どれほど効力があるのか

Q4. ティンプー市のごみ不法投棄の現状と、その要因はどこにあると捉えているか

Q5. 現在のごみ収集率¹¹はどのくらいまで上昇したのか

Q6. ティンプー市が認識している、次なる環境問題は何か

3. 調査結果

I) インタビュー結果

今回の調査では、合計 14 組のブータンの方々にインタビューを行うことができた。時間的な制約も相まって十分な人数から回答を得ることはできなかったが、今回調査に協力して頂いた方々は、いずれも環境・ごみ問題に対して非常に高い関心を持っていることが分かった。

調査を経て、特に Q5 で「不法投棄を行う人がいる理由」について意見を求めたところ、インタビューをしたすべての人が「環境に関する教育を十分に受けていないから」「環境保全の知識がないから」というように、一貫して環境教育の不十分さを指摘した。また、子どもと大人で回答に大きな差が見られたのは Q3 と Q4 であった。Q3 の「ごみ問題についての主な情報源」として、子どもたちは全員が「学校」、ほとんどの大人は「政府や行政」と「マスメディア」が同じくらいだと回答した。Q4 で「ごみ問題に係わる国家的な政策目標」について問うと、子どもたちは「分からない」「あることは知っているが説明はできない」という様子で、大人に関しては瞬発的に「カーボンニュートラルな国づくりを目指している」「2030 年までにごみの排出をゼロにする」という国家が目指している取り組みを十分に認識・理解している様子であった。加えて、こうした目標を達成するために必要な要素について回答を求めると、「人々を真に導くことができるリーダーが必要」「幼少期からの家庭教育が重要」など、ブータンの内面的事情に触れることができる瞬間が多くあった。

その他の設問については個人によってばらつきが見られ、回答者が居住する都市、インタビュー人数の制約により、全体の傾向として統計結果を提示することはできなかった。

II) 街路散策の結果

まず、ごみの不法投棄やポイ捨てが多い場所については、圧倒的に車道脇が多く、プナカ〜ティンプー間で唯一目撃した不法投棄（120cm×170cm 位の木版のようなもの 3 枚）も、車道から谷底に向けて行われていた。次いで街中の歩道、裏道、プナカ・ゾン近くの木が多い場所等にごみが多く見られた。意外にも、川への不法投棄やごみのポイ捨ては非常に少なく、むしろ川沿いに設置されていたごみ箱の様子から、川を利用した人々は秩序良くごみ箱を利用している様子だった¹²（写真 1）。また、タクツァン僧院までの道のりも概して良好で、川と同様にごみ箱の設置利用が見られた。

次に、投棄されているごみの種類は、場所によって特徴が見られた。車道脇のごみはペットボトルが非常に多く、ジュースの紙パックやお菓子の袋のようなものも捨てられていた。それ以外の上記に示した場所では、車道脇に見られたごみの他、みかんの皮が大量に捨てられていたことが驚きだった。特にプナカ・ゾン近くの木が多い場所では、かつて見たことのないほどのみかんの皮とペットボトル類のごみで散乱していた。また、歩道ではドマ¹³の影響が見られたものの、実際に所構わず吐き捨てているような人々は、今回の調査では見られなかった。よって、街路散策による主観評価は「準不潔、一部良好」であり、現状を放置すれば悪化の一方を辿ることは明らかだった。



写真 1 パロの川沿いのごみ箱
（2023 年 2 月 12 日、安藤撮影）

Ⅲ) 公的機関への取材結果

JICA ブータン事務所では、Ⅰ・Ⅲ両方のインタビューシートに基づいて、ナショナル・スタッフの Krishna Subba さんにお話を伺うことができた。彼によると、現在ティンブー市のごみ問題は“深刻”な状態にまでは至っていないものの、やはり一定の弊害はあるという。その最大の要因は、公的空間や自然環境に対する市民の責任感が欠けているからだと言明し、特に学校帰りの生徒や学生によるごみのポイ捨てが目立つとのことだった。こうした状況への対策案として、①幼少期からの学校教育に Waste Management (環境教育) のカリキュラムを導入すること、②罰金制度など何らかの強制力を働かせること、という 2 つの方法に可能性を見いだしていた。特に環境教育については、b の事業がカバーした範囲はティンブー市のみだったため、より全国的な普及が要されるとの様子だった。また、ティンブー市に 7 カ所設置されているドロップインセンターについて、「特別な強制力のある施設ではないが、市民の衛生意識の自律化を図ることができる有用な施設だ」と述べていた。加えて、昨年夏より、ドロップインセンターの場所を確認できるオフィシャルアプリも導入したそうで、今後はその普及に努めたいとのことだった。

続くティンブー市役所では、環境部のウゲン・ツェワンさんとケザンさんにお話を伺うことができた。取材では、主に b の事業における環境教育の普及について質問したが、それがどれほど国民の衛生意識に影響を及ぼしたのか等、具体的な回答を得ることはできなかった。一方、Q2 の「2030 年までのゼロ・ウェイストの実現に向けて注力している取り組み」に関する回答として「罰金制度」を明言しており、今後も強化を進めていくという。また、Q3 の「ゼロ・ウェイスト・アワー・イニシアティブの効力」について、「同イニシアティブはもはや生活の一部になりつつある」とし、「人々の意識を変えることは難しいが、こうした活動を通して徐々に浸透させてゆきたい」とのことだった。質疑応答の最後には、両名とも環境・ごみ問題の解決には「国民の協力」が必要不可欠であると締めくくられた。

4. 考察

現地調査を経て次のことが考察できる。第一に、ブータンにおける環境教育は全国的にそれほど普及しておらず、b の事業で実際に環境教育が進められたのはティンブー市に限られていた。(＝他都市への派生的な影響なし。) 制度的な不足に加えて、家庭で醸成された衛生意識にもかなりの個人差があるため、環境やごみ問題に対する現状認識にばらつきが生じている。その結果、生活環境における良好な衛生状態は当然のように“重要だ”と認識していながらも、実際にはごみ問題が後を絶たないという大きな矛盾が生まれていると考えるに至った。第二に、GNH を動機に環境・ごみ問題の解決策を求めることには些か懐疑の余地がある。実際に、何人かのブータン人は GNH よりも仏教や国王からの教授の方が断然心に響くといい、彼らの「幸福」や「豊かさ」の根源に、必ずしも GNH 政策が結びついていないことが露呈したといえるだろう。

よって、ブータンの環境・ごみ問題解消に向けて、以下の 3 つが要請されると考える。1 つ目は、仏教や僧院、国王によるさらなる教授である。先述した通り、その影響力の強さはブータン人を導くリーダーに相応しく、環境分野においてもより強いメッセージの発信が求められている。彼らがブータン人の精神的豊かさに訴えることで、徳ある行動を「清掃」意識に結びつける役割が期待される。2 つ目は、家庭・学校でのごみ分別の徹底である。まずは、行政が埋め立てに頼

らない廃棄物処理方法を模索する必要があるが、人々の意識付けには時間を要することが懸念されるため、早期にごみ「分別」の概念を定着させる必要がある。同時に、分別に対応したごみ箱の導入も検討されるべきである。3 つ目は、持続可能な強制力を行使することである。インタビューを経て、ごみ問題の解決方法に、政府からの強制力である「罰金」に頼る声が多く上がっているが、私はより持続的で、広く浸透する方法も模索する必要があると考える。例えば、プラスチックバックの使用禁止について、代替品を伝統工芸品（織物など）でまかなうことができれば、自国の伝統文化の維持に貢献できると共に、人々の自律的な意識を養うことに繋がるのではないだろうか。

以上をもって、本研究調査の報告とする。

5. 調査に参加した感想

自分の専門分野、地域、時代を超えて、まったく新しい経験を積むことができたことに大きな達成感を覚えている。研究内容については、やっととはじめの第一歩を踏み出すための、助走レーンが完成したような場所にいることを痛感しているが、10 日間の実習を経て、資料だけでは分からない現地調査の重要性に改めて気づかされた。何よりも、ブータンで出会った人々の人間としての優しさや温かさ、こちらが照れくさくなってしまうほどの日本人歓迎の様子は、驚きと共にこの上なく幸せな時間だった。同時に、彼らの内面の「豊かさ」に触れた今、果たして日本人は「豊か」に暮らせているのだろうか、真の「豊かさ」を何に求めるのか、帰国してからも「豊かさ」を取りまく問いに思いを馳せている。

最後に、ブータンの文化に身を置き様々な人と交流できたこと、自分の日常を問いなおす契機になったことが、スタディツアーに参加した大きな意義だと考えている。

6. 注

- 1) 独立行政法人国際協力機構「JICA 草の根パートナー型事業 平成 24 年度第 2 回採択内定案件」
- 2) 独立行政法人国際協力機構「ブータン 各国における取り組み」
<https://www.jica.go.jp/bhutan/index.html>（最終閲覧日：2023 年 2 月 19 日）
- 3) 大澤正明（2014）「ブータン王国ティンブー市における環境・ごみ問題世論調査」『廃棄物の専門誌』44: pp.1-12.
- 4) 大澤前掲書, p.39.
- 5) 大澤前掲書, p.39, p.43.
- 6) 大澤前掲書, p.44.
- 7) Rajesh Rai (2022) “Phuentsholing Thromde collected 13.6MT waste from Mega Night event”, Kuensel Online, <https://kuenselonline.com/phuentsholing-thromde-collected-13-6mt-waste-from-mega-night-event/>及び Chhimi Dema (2022) “141 violators fined in a day for waste offenses in Thimphu”, Kuensel Online, <https://kuenselonline.com/141-violators-fined-in-a-day-for-waste-offences-in-thimphu/>（いずれも最終閲覧日：2023 年 2 月 22 日）
- 8) 住民が廃棄物を持ち込み、分別してコンテナに捨てることができるという、住民参加型のリ

サイクル施設。

- 9) 先行研究・事業における b の事業を指す。
- 10) 2019 年に制定されたイニシアティブ。すべてのブータン国の公務員に対して、毎月 2 日に、周辺を清掃するために 1 時間を割くことを義務付けている規定。
- 11) 事業 c によると、2019 年時点で 82.1%に至ったごみ回収率を、2023 年には 95%に引き上げる目標を設定している。
- 12) 実際に近くで調査できたのはパロの川である。ティンプーの川は車内から視察し、ごみ箱設置の有無は確認できなかった。ブンツォリンに関しては川の水が不在だったため調査不可能だったが、川底の状態は比較的良好であった。
- 13) ビンロウの種子をキンマという葉でくるみわずかな石灰と一緒に噛むもので、ニコチンと似た興奮・刺激作用がある。唾液を飲み込むと胃を痛めるということで、場所をかまわず吐き捨てるので、歩道には真っ赤な汁と白い石灰のあとが点々とみられる。(大澤前掲書, p.33.)

7. 参考資料

独立行政法人国際協力機構「JICA 草の根パートナー型事業 平成 24 年度第 2 回採択内定案件」

独立行政法人国際協力機構「JICA 草の根パートナー型事業 2016 年度第 2 回採択内定案件」

独立行政法人国際協力機構 (2018)「世界のごみの現状を知る」『mundi』 pp.4-7.

独立行政法人国際協力機構 (2020)「ブータン国 廃棄物管理改善計画 事業事前評価表」

独立行政法人国際協力機構 (2020)「ブータン国 廃棄物管理改善計画 準備調査報告書 (先行公開版)」

ブータンの伝統芸術における性別分業とジェンダーアイデンティティ

文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コース 2年

山本 愛理

1. 調査のテーマ

本調査において、「ブータンの伝統芸術における性別分業とジェンダーアイデンティティ」をテーマに据えて研究を進めた。ブータンにはゾリン・チュスム (Zoring Chusum) という 13 の伝統工芸の区分けがあり、事前学習の段階で、それぞれの伝統工芸に性別分業的要素が見つけられた。例を挙げると、Thag zo (織物) の担い手のほとんどは女性であるのに対し、Lha zo (絵画) に従事しているのは男性が多い。伝統工芸の担い手の性別の偏りには何が影響しているのか、反対に、伝統工芸における性別分業がブータン人のジェンダー観に作用している部分があるかを明らかにすることを目的とした。

2. 調査場所・対象

今回、ブータンの伝統工芸の技術を学ぶことができる伝統技芸院に訪問することができた。伝統技芸院は、もともとブータンの若者の失業対策として労働省 (現在の Ministry of Industry, Commerce and Employment) が設置した施設で、教育機関ではない。また、以前は男性のみしか入学が許可されなかったこともあり、現在も学生の大半が男性である。

この伝統技芸院と、スタディツアーの日程の中で訪問した先で出会った多様なブータンの人を調査対象とした。

3. 調査設問

調査に当たり、アンケートとインタビューの 2 つの調査方法を活用した。

アンケートの設問は以下の 3 つを設定した。

1. 回答者の性別。
2. ゾリン・チュスムに含まれる 13 の伝統工芸について、それぞれ特定の性別によって行われるというイメージを持っているか。
3. これまで、伝統工芸における性別分業について疑問を持ったことがあるか。

インタビューでは、訪問した伝統技芸院の学生と、その他の人々に対して設問を用意し、調査の進行状況に応じて行った。

まず、伝統技芸院の学生には

- A. どうして伝統技芸院に入学し、現在、自身が所属しているコースで習得できる伝統工芸を学ぼうと思ったのか。
- B. 自身が学んでいる伝統芸術に関して、特定のジェンダーイメージがあるか。

C. ブータンは男女平等を実現していると思うか。

以上3つをインタビューした。その他の人々には、主に設問Cを聞き取り調査した。

4. 調査結果

4-1 アンケート結果

まず、アンケートの集計結果を以下に示す。

表1 アンケート集計結果(設問1・2)

番号	性別	設問1	木工工芸	石細工	彫刻	絵画	彫塑	鋳造	木細工	鍛冶	装飾	竹細工	製紙	仕立て	織物
1	伝統 男														
2	伝統 男														
3	伝統 男														
4	伝統 男														
5	伝統 男														
6	伝統 男														
7	伝統 男														
8	伝統 男														
9	伝統 男														
10	伝統 男														
11	伝統 男														
12	伝統 女														
13	伝統 女														
14	伝統 女														
15	一般 女														
16	一般 男														
17	一般 女														
18	一般 女														
19	一般 女														
20	一般 女														

表1は設問1・2の集計結果を示している。種別は、回答者が伝統技芸院の学生の場合には「伝統」、それ以外の場合は「一般」としている。また、設問1から右に示した13の項目はゾリン・チュスムに含まれる伝統工芸の名称で、それぞれの項目に対し、回答者が「男性」のイメージを持っていると答えた場合は青、「女性」の場合は赤、「どちらも」または「どちらでもない」と答えた場合は緑、無回答の場合は斜線を該当欄に示した。

全体の傾向として、「仕立て」と「織物」に関しては女性のイメージを持っている人が多く、「絵画」、「竹細工」、「製紙」の項目では特定の性別のイメージを持っていない人が多く、それ以外の「木工工芸」、「石細工」、「彫刻」、「彫塑」、「鋳造」、「装飾」については男性のイメージを持っている人が過半数を超えた。

伝統技芸院の学生とその他の人々とで見られる異なった傾向としては、「絵画」に女性のイメージを持っている人は伝統技芸院の学生のみで、「竹細工」と「製紙」に関しては、一般の人々は特定の性別のイメージを持っている人はいなかった。

また、興味深いのは、伝統技芸院の女子学生の1人が、他の学生の回答とほぼ真逆の伝統工芸に対する性別のイメージを持っていたことだ。

次に、設問3のアンケート結果を示す。

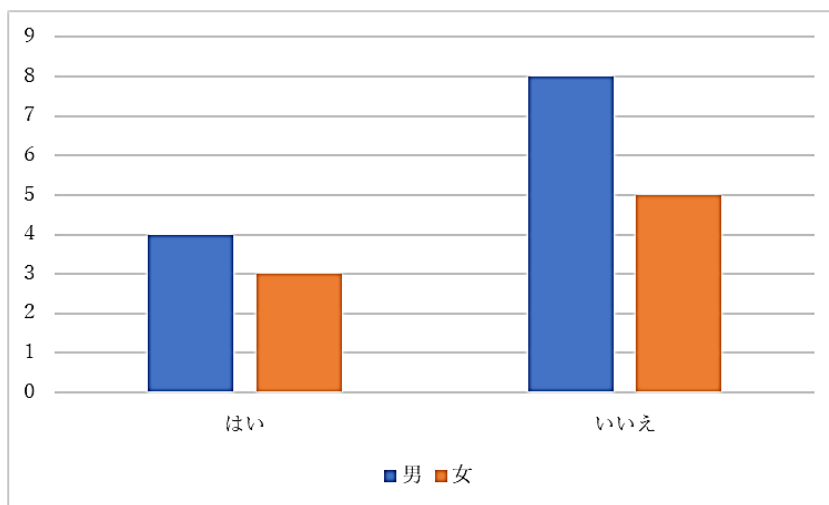


図1 アンケート集計結果(設問3)

「これまで、伝統工芸における性別分業について疑問を持ったことがあるか」という設問に対して「はい」と答えた人は「いいえ」と答えた人に比べ、男女ともに少なかった。また、男性より女性の方が、「はい」と答えた人の割合がやや高いことが分かった。

4-2 インタビュー調査結果

インタビュー調査の結果を示す。

はじめに、伝統技芸院の学生への聞き取り結果を述べる。

設問 A の、「どうして伝統技芸院に入学し、現在、自身が所属しているコースで習得できる伝統工芸を学ぼうと思ったのか」に対して、調査を実施したすべての学生が「興味があったから」、「好きだから」、「趣味だったから」など、自身の自発的な伝統工芸への興味関心を理由にしていた。どの伝統工芸を学ぶかを選択する際に、伝統工芸に対する特定の性別のイメージを理由にした人や、参考にした人はいなかった。

インタビューした学生の中には、「自分のクラスメイトに、生活のためにやむなくここ（伝統技芸院）に来ている人もいる」と回答した人もいた。ただ、依然として学生の進路選択において伝統芸術への特定の性別のイメージは影響していないという回答だった。

しかし、設問 B 「自身が学んでいる伝統芸術に関して、特定のジェンダーイメージがあるか」に対しては、「ある」と答えた人が多かった。ブータンの伝統的な祭祀である「ツェチュ」で使用する面（Mask）の製作を学ぶコースに所属している男子学生は、「面を作るのは専ら男性。もしこのコースに女子学生が入ってきたら少し変わり者だなと思う」と話していた。どうして面を制作するのは男性なのか尋ねると、「単に女性は面に興味がないからだと思う。特にジェンダーのイメージを意識したり、女性が物理的に面の製作を学びにくいということではない」と回答があった。また、織物（Weaving）のコースの女子学生も同様に、「男性は織物に興味がない。織物のコースに男性が入ってきたら、相当物好きだと思う」と話していた。

設問 B のインタビュー調査から、伝統工芸は意識的な性別分業はされていないが、無意識のうちに形成された、性別で異なる興味関心を抱く傾向が色濃く反映されていると感じた。

設問 C「ブータンは男女平等を実現していると思うか」については、インタビュー調査を行ったすべての学生が「実現している」と答えた。その理由には「教育や職業選択などの機会の均等」が多く挙げられた。これは、一般の人々に聞き取りをした際も同じ回答が得られた。

さらに、伝統技芸院訪問時に学生だけでなく、教員にもインタビュー調査を行うことができた。JICA の海外協力隊員として活動している日本人男性教員からは、「織物や刺繍は女性、それ以外の伝統工芸は男性が担うという構図がある」との回答を得た。仏像彫刻を教えるブータン人男性教員は、「過去に 8 人の女性が卒業しており、皆、とても優秀であった」と話す一方で、「伝統技術の習得には長い年月がかかる。将来、結婚や出産を通して家庭を軸に生活する人が多いため、女性はあまり伝統工芸を仕事にしないのではないかな」とも述べていた。特に仏像彫刻に関しては、「元々、仏像は僧しか制作できないもので、弟子に代々作り方を教える方法で技術が伝承されていたが、3 代国王の治世で初めて僧以外の門徒にも仏像彫刻の門徒が開かれたことにより、女性も仏像彫刻をすることが可能になった」という。しかし、「ブータンにおいて、寺院の守り神、神仏がいるとされる部屋は女人禁制になっているところがあり、その部屋に飾る仏画や仏像を女性は作ることができないため、女性でこの職業を目指す人が少ないのかもしれない」とも述べていた。また、「この神仏の仏画・仏像を作るときは、決められた部屋に一定期間籠って制作に専念する必要があり、家を長期間にわたり空けることになるため、これも女性を仏画や仏像彫刻から遠ざける一因になっている」と話していた。「単に男性に比べて女性は彫刻に興味がないから仏像のコースの志願者が少ない」とも述べていた。

街中で調査を行っていた際、偶然入ったプナカの雑貨屋の奥で、機織りをしている女性を見つけ、話を聞くことができた。その女性は、14 歳から機織りを始め、現在は 45 歳であった。女性の一家では、機織りをするのは女性だけだという。その理由を聞くと、「男性は機織りに興味がないから」という回答が返ってきたが、その女性自身は、「興味があるからではなくお金のため必要になり機織りを始め、今でも楽しさはあまり感じていない」という。矛盾のあるインタビュー結果が得られた。

ホームステイ先の 10 代女性にインタビューした際、「どうして刺繍や織物以外の伝統工芸に女性は興味を持たないのか」と質問すると、「以前は伝統技芸院が男性のみ入学できたこともあり、伝統工芸について女性が知る機会があまりないから」という回答が得られた。そもそも、主に現在、男性によって担われている伝統工芸について知る機会が女性は少なく、それが伝統工芸の性別分業の一因になっているのかもしれない。

5. 考察

本調査を通して、ブータンの伝統工芸における性別分業は、伝統工芸そのものに対するジェンダーバイアスや男女の区分けがなされているのではなく、普遍的なブータン人のジェンダーアイデンティティと、伝統工芸が創り上げてきた歴史によって生じていることが分かった。

織物は女性だけでなく男性も、仏像彫刻だって女性がやっても良い。しかし、男性は織物より仏像の方に興味があるし、女性は織物や刺繍の方に惹かれる。このような、伝統工芸特有というよりは、社会的に通じる、男女の二元的なジェンダーイメージが無意識のうちにブータン人の元からのアイデンティティであるかのように形成され、それに則って性別分業的状况が伝統工芸の

分野で起こっているのである。

この背景には、ジェンダー平等が意識される前の仏教的観念から生じた、性別による職業の限定や慣習が色濃くある。女性が寺院の神仏を描くことを禁止されていることなど、仏教観念の中には必ずしも男女平等とはいえない決まりがあるが、それに対して疑問を持つブータン人は少ない。それは、彼らにとって守ることが当たり前の「伝統」だからだ。ブータンでは、「伝統」と「男女平等」は切り離されて考えられているのである。加えて、伝統技芸院がかつては男子のみに門扉が開かれていたことなど、仏教以外の歴史要素も影響している。

また、ブータンの人々に認識されている「ジェンダー平等」ということばは、本来の「ジェンダー平等」とは剥離していると考えられる。男女平等や女性政策について考える時、しばしば「機会の平等」と「質の平等」が取り沙汰される。「機会の平等」は、法律の上でジェンダー平等が達成されているという意味で、教育の平等や、参政権、職業選択の自由などが挙げられる。この段階では、それぞれの性別に限定された障壁・困難が実際に解消されているかどうかは考慮に含まれない。これに対して、「質の平等」は、法律上のジェンダー平等が達成されていることを前提として、実生活においても男女が性別を理由に不利な社会生活を強いられることなく、それぞれが人としての権利を確実に保持できている状態である。教育の機会均等が確保されても依然として女性の大学進学率が男性に比べて低い現状を考慮して、アフーマティブ・アクションとして女子大学を設けたり、女性議員を増やすために大学と同様、アフーマティブ・アクションの一貫として一定の議席数を女性議員に与えることなどが「質の平等」の一例である。ブータンでは「機会の平等」＝「ジェンダー平等」として捉えられている節があると感じた。そもそも、ジェンダー平等の定義が本来のものとずれて敷衍しているため、「質の平等」が達成されていないことに気付いていない人が多いのではないかと。

これに加え、ブータン独特の仏教信仰の伝統や慣習が作用し、外部から見ればジェンダー平等が達成されているとは決して言えない部分に対して、ブータンの人々は特に疑問を持たず、少し不平等を感じたとしても「伝統だから」で納得してしまうのではないかと考えた。

伝統工芸に対してもこのブータン人の感覚が適応されているのである。

つまり、伝統工芸における性別分業は、ブータン人のジェンダーアイデンティティやジェンダー平等に対する考え方・意識そのものが反映された結果であったことが分かった。

6. 感想

「伝統工芸における性別分業」という、非常に限定的なテーマで調査に臨んだが、自分が想像していたものとはまったく異なる結果が得られ、調査を進めていくうちに他のテーマとの関連性を多く見つけることができた。特に、宗教・伝統とジェンダーの関係は、これから時間をかけて研究したいと思えるとても複雑で深いテーマだと気づくことができた。「仏教も他宗教も、根源は同じ。人の心を清らかにするためにある」と、25年間の瞑想の旅から帰ってきた男性は確固とした自信をもって私に語りかけた。しかし、ならば、どうして時として宗教同士が対立するのか。人の心を清らかにするどころか、蝕み破壊へ導く宗教が現れるのか。人間にとって絶対的な存在になり得る「宗教」と、人間の本質である「ジェンダー」が共生していくためにはどうしたらよいのか。一生かけて考えていく価値のある問いをブータンで与えられた気がした。

私は、今回の実習で「自分の将来のヒントを見つける」という目標を立てていた。学問においてもそれ以外でも、この目標は達成されたと思う。初めて降り立ったブータンは、私の心を魅了し続け、自分の中の新たな世界の扉を開け放してくれた。将来、どんな人生を送ったとしても私の中にブータンは生き続け、今回の旅の思い出は心の支えになるだろう。

7. 参考文献

ブータン政府観光局「ゾリン・チョザム (Zoring Chusum) : ブータンの 13 の伝統工芸」(最終閲覧日 : 2023 年 2 月 27 日) http://www.travel-to-bhutan.jp/about_bhutan/芸術・工芸

ブータンの交通網が食に及ぼす影響

文教育学部人文化学科グローバル文化学環 3年

田村 彩佳

1. 調査のテーマ

1-1 交通網と経済

交通網と物の価格には大きな関係がある。藤井は幹線交通網整備の社会的なメリットとして、当該地域の住人が「当該地域への物流コストが低下することによる『物価低下』も期待できる」こと、当該地域以外の住民が「当該地域で算出される産物の物流コストが低下することによる『物価低下』も期待できる」ことなどを述べている。つまり、交通網が発達している地域と比較して、交通網が発達していない地域では物価が高くなる傾向があるということである。このような交通網による物価の違いは、地域格差を生む場合がある。例えば ASEAN 諸国が挙げられる。ASEAN 地域の経済格差を拡大させずに地域の発展を推進するために、橋本は「当該地域の域内交通網の整備と ASEAN と他の地域とを結ぶ国際交通網の整備がとりわけ重要になってくる」と述べている。交通網は経済発展や物価と密に関連し、交通網の発達の人々の生活に不可欠なのである。

1-2 ブータンの交通網

ブータンは中国とインドに隣接する、海に面しない国である。そのため、ブータンの物流は空輸や陸送がメインとなる。しかし、ブータンはヒマラヤ山脈周辺に位置しているため、標高が高く、地形は険しく、空輸での物流は向いていない。つまり、ブータンでの最も重要な物流手段は陸送となるだろう。しかし、2019 年時点で主要道路は国道 1 号線から国道 5 号線までの 5 本と少ない。また、大部分が急傾斜地を通過しており、雨期は斜面崩壊で交通が遮断される地域が発生し、農作物の出荷や人の移動に支障をきたすこともあるなど、道路交通網の状況は不十分である。

1-3 調査のテーマ

このことから、ブータンでは交通網が発達している地域と発達していない地域があること、それによる物の価格や物へのアクセスに地域間で差異があり、人々の生活に影響を与えていることが考えられる。そこで、本調査では食品に焦点を当て、「交通網がブータンの人々の食生活に及ぼす影響」をテーマとする。交通網を考慮しながら地域間での食品の価格の違いを調査するとともに、インタビューを行うことで、ブータン国内での交通アクセスや食糧価格への認識を考察する。

2. 調査設問

本調査では実際にブータンのティンブー、パロ、ブンツォリン、プナカの 4 つの地域を訪問する。それぞれの地域の特性として、ティンブーは首都であること、パロには空港があること、ブンツォリンはインドに隣接していること、プナカは上記のどれにも該当しない地域であることが挙げられる。このような特徴も考慮して考察を行う。

以下は調査方法である。

2-1 地域ごとでの米の値段の検証

それぞれの地域で市場やスーパー、雑貨屋などを訪問し、米の値段の最低価格と最高価格を調査、比較し、交通網の観点からどのような要因のもとで価格が制定されているのかを考察する。

2-2 インタビュー

JICA ブータン事務所で、ナショナル・スタッフにインタビューを行う。インタビュー内容は以下の2点である。(1) インドの国境に近いブンツォリンのような地域では食糧価格が安く、田舎の方の地域では食糧価格が高くなるか。(2) 雨季などに災害で交通網が遮断されて食糧が届かなくなることはあるか。以上の2点を通して、ブータンの交通網が人々の食生活に影響を及ぼしているのかを考察する。

3. 調査結果

3-1 地域ごとでの米の値段の検証

4つの地域での米の最低価格と最高価格は以下(表1)の通りである。なお、小数点以下は四捨五入している。

表1 各地の米の価格

地域名	ティンプー	パロ	ブンツォリン	ブナカ
価格(1kgあたり)	100Nu ¹ ~175Nu	50Nu~219Nu	29Nu~70Nu	45Nu~67Nu

この他に注目すべき点として、米のラインナップの豊富さが挙げられる。ティンプー、パロ、ブンツォリンでは数え切れないほど多くの店で、多くの種類の米が売られていた。

3-2 インタビュー

JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフの中で、農業関係に詳しい一人にインタビューを行うことができた。

まず、(1) インドの国境に近いブンツォリンのような地域では食糧価格が安く、田舎の方の地域では食糧価格が高くなるか、という質問に対しては、「その傾向がある」という回答をもらった。インド産の食糧が多いため、インドに近い地域では値段が安いのに加え、新鮮な食糧が手に入りやすく、種類や量も多いという。

次に、(2) 雨季などに災害で交通網が遮断されて食糧が届かなくなることはあるか、に関しては、「それもたまにある」とのことだった。しかし、ブータンの食糧と道路交通状況の関係に関しては、これ以上に問題なのは食糧の運び方と道路の状態の悪さだという。ナショナル・スタッフのかたは、「ブータンで運ばれる食品は良い梱包や包装が施されていない。そのため、食品が長時間空気にさらされたり、ボコボコした道や曲がりくねった道のせいで食糧が壊れたり潰れたりして、食品のクオリティが下がってしまう」と述べた。このような現状に関して、ナショナル・スタッ

フのかたは3つの改善案を提示した。(1) 保冷車の導入、(2) 道路状況の改善、(3) 食品のパッケージの改善、である。このような改善点を実行していくことが、現在のブータンの道路状況と食品の状況において求められているとのことだった。

4. 考察・課題

4-1 考察

地域別の米の値段に関しては、プンツォリンの最低価格が最も安く、米のラインナップが豊富であったにもかかわらず、最高価格も 70Nu と非常に安い。一方、ティンプーとパロは最低価格も最高価格も比較的高いため、やはり首都や空港がある街であっても、インドと国境を接しているというアドバンテージを持つプンツォリンにはかなわないということが見て取れる。また、ティンプーは首都であるが故に物価がやや高く設定されていること、ティンプーとパロは観光客も多いため、ある程度お金を持っている層に向けた値段が設定されていることが考えられる。プナカの米の価格は比較的安いですが、他の地域と比べると売られている米の種類は少なかった。

また、JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフも、インドの国境に近い地域では食糧価格が安く、田舎の方の地域では食糧価格が高くなることを感じていた。一方、災害などで食糧が運ばれないことはあるが、このような事例はそこまで多くはないということから、災害時の道路状況はそこまで食に影響を及ぼしてはいないと考える。しかし、食品パッケージの質や道路状況の悪さから、運ばれてくる食品の状態が良くないことが伺え、質の悪い食品が大量に出てしまった場合、売ることのできる食糧の価格が高くなってしまう可能性はあるだろう。

以上のことから、インドの国境に近い地域では人々は安く新鮮な食糧を手に入れることができることがわかる。首都や空港のある街では比較的値段は高いものの、豊富な種類の食糧が用意されている。一方プナカのような内陸地域では、管見の限り食糧の種類は少なかった。このような現状から、ブータンの交通網は食の価格や鮮度、選択肢という点で、人々に影響を及ぼしていることが理解できる。

4-2 課題

今回の調査では、米の価格を調べたものの、すべての店を見て回ることは不可能であったため、一部の店しか調査することができなかった。また、店は現地で見つけたものを適当に選んで入店していたため、調査した店のタイプによって米の値段にばらつきがあったと考えられる。そのため、今後同様の調査を行う際は、店の種類を統一すること、なるべく多くの地域、店を調査することでより実態に近い結果を得る必要があるだろう。

5. 調査に参加した感想

私はこれまで資料や文献でしかレポートを書いたことがなかったため、今回の調査が私にとって初めての現地調査だった。自分でテーマを考え、仮説を立てた上で、仮説を実証するために調査を進めるおもしろさを感じられた。私の研究は特に、7割程度は仮説通りに調査が進んだため、自分が頭の中で考えていたことが現実世界で思った通りに出てくるところが楽しさを感じられた点だった。また、他の人の研究に同行することで、自分の研究以外の分野の知識を深める

ことができたり、自分では思いつかないような体験をしたりすることができたのはとても良い経験だった。

一方、「国際協力を専門として学ぶ者として、学生のうちに一度は途上国を見に行こう」という思いのもとでこのスタディツアーに参加したのだが、ブータンを見れば見るほど「途上国ってなんだろう」「国際協力は必ずしも必要なものではないのかもしれない」と思うようになってしまったという点で、自分がこれまで正しいと思っていたものを見失ってしまったように感じる。しかし、このような感情を持つことができるようになったのも、このスタディツアーに参加できたからであり、この実習で得ることができた良い学びの1つだと感じる。途上国とは何か、国際協力の意義とは何か、についてはすぐに答えの出る問いではなく、一生かけても見つからないものなのかもしれないが、これから先の授業や日々の生活の中で絶えず探し続けていきたいと思った。

渡航前に立てた「言葉が通じなくても積極的に話しかけて意思疎通を図る」という目標はある程度達成できたと感じている。JICAでのインタビューやホームステイ先など、様々な場所で、英語でなんとか話をしようとできないなりに努力した。簡単なゾンカ語を覚えて道行く人に挨拶をし、現地のかたと微笑み合えたことも嬉しい経験だった。とはいえ、自分の語学力はまだまだ完全すべきだと感じたため、今後も語学学習に力を入れていきたい。

6. 注

1) Nu (ヌルタム) はブータンの通貨の単位。2023年2月現在、1ヌルタムは約1.6~1.7円。

7. 参考文献

藤井聡(2006)「幹線交通網整備の社会的なメリットとデメリット」『運輸政策研究』第8号、pp.19-24。

橋本雅隆(2009)「ASEAN 交通網における東西経済回廊の意義と国際交通網発展への課題」『横浜商大論集』横浜商科大学学術研究会編、第43号、pp.87-101。

渡邊恵子「最後の秘境ブータン：道路事情から垣間見る」(最終閲覧日：2023年2月5日)

https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2019/11/global_1911_2.pdf

ブータンにおける LGBTQ+への寛容度

文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 3年

石田 優花

1. 調査テーマ

1-1 研究背景・目的

ブータンについての事前学習を始める前、ブータンについて一番始めに思い浮かべたのは「幸せの国」というキーワードである。私の「幸せの国」のイメージは、自然が豊かで食料が豊かで誰もが幸せに生活でき、同性婚ができる国であった。しかし、事前学習を進めるうちに、ブータンでは同性婚は認められておらず、2021年2月までは同性間の性交渉は違法であったことがわかった。このようなことから、ブータンにおける LGBTQ+の人への理解の現状と同性婚に関する認識を調査し、現在は日本と同じく同性婚が認められていないブータンが同性婚について今後どのように変化するのかを考察することが研究の目的である。

先行研究についてブータンの LGBTQ+に関する研究は見つけることができなかった。そのため、LGBTQ+の理解に関する先行研究に基づき、調査内容を検討した。宗教と LGBTQ+への理解は関連が見られる。Sani et al (2015) の研究では、宗教のある人のほうが同性愛に対して否定的であり、信仰が深いほど否定的であるということがわかっている。石原 (2012) の研究によると、日本においては男性で仏教を信仰している人の方が他の宗教の人より同性愛に否定的であるということがわかっている。居住地域と LGBTQ+への理解にも関連が見られ、Andersen and Fetner (2008) の研究では、居住している地域が都市で人口規模が大きいほど同性愛に寛容な考えを持ち、人口規模が小さいほど同性愛に否定的な考えを持つ傾向があることがわかっている。¹ジェンダーと LGBTQ+への理解にも関連があることも多くの研究結果からわかっている。石原 (2012) の研究は、女性の LGBTQ+への寛容性は常に男性よりも高いという欧米の傾向が日本でも当てはまることを明らかにしている。そのほかに、LGBTQ+当事者との接触のある人の方が同性愛に対して否定的な考え方を持たない傾向があることが石丸 (2008) の研究で明らかにされている。これらの先行研究を踏まえ、2つのリサーチクエッションを立てた。

1-2 リサーチクエッション

RQ1：ブータン人は LGBTQ+の人々、及び同性婚に寛容的²であるのか。

RQ2：寛容的／非寛容的な考え方の影響要因はなにか。

2. 調査設問

先行研究を踏まえ、宗教・地域・ジェンダーの項目と年齢の関連を想定して基本質問に設定した。本調査はセンシティブな内容を扱うため、回答者が回答しやすいミス・ブータンの認知に関する設問を1問目に設定した。調査媒体は英語表記の質問紙に加え、英語表記の Google form を使用した。調査方法は半構造化インタビューで、下記の8つの質問項目を回答してもらい、その回答理由などを口頭でインタビューした。Google form の場合は任意で解答理由を入力できるよ

うにした。

フェイスシート項目（4項目）

- Your age
- Your religion
- Your home town
- Your gender

調査項目（8項目）

Q1: Do you know Ms.Bhutan (Tashi Choden)?

Q2: Do you care about LGBTQ+ issues?

Q3: Do you understand that LGBTQ+ people exist?

Q4: Do you think LGBTQ+ is natural?

Q5: How did you first hear about LGBTQ+?

Q6: Why did you come to understand LGBTQ+ people?

Q7: Do you agree that same-sex marriages can be performed in Bhutan?

Q8: Do you think same-sex marriage will be available in Bhutan in the future?

3. 調査結果

今回の調査では14名からの回答を得ることができた。

Q1の結果は、13名がYesと回答し、1名がNoと回答した。Yesの回答には、詳しく Ms.Bhutan (Tashi Choden) のことを知っているわけではないが、テレビで見た記憶があるという回答も含まれていた。Ms.Bhutan (Tashi Choden) は LGBTQ+当事者であることを公言したということで、ブータン人にとって LGBTQ+を知る機会になったのではないかと考え設問に加えたが、実際にはより有名なブータン人の LGBTQ+当事者がいることがわかった。

Q2の結果は、Very much が5名、Quite a lot が5名、A little が4名であった。2年ほど前に同性間での性交渉に関する刑法が改正されたばかりであるが、3分の1の回答者はあまり LGBTQ+問題への関心はないということがわかる。

Q3の結果は、Very much が10名、Quite a lot が4名であった。Q3の質問は LGBTQ+の人々の存在を理解できるかという質問であり、表面的な LGBTQ+への寛容度を計る質問であった。つまり、今回の結果ではブータン人はブータンに LGBTQ+の当事者が居住しているということを理解しており、日本のように LGBTQ+の人々の存在は道徳的に認めることができないという意見を持つ人はいなかった。Q3に関する追加インタビューでは、LGBTQ+に関する知識をメディアやブータンにある当事者コミュニティの情報発信から得ているため、ブータンの LGBTQ+当事者の存在を知る機会が増えているということがわかった。情報発信というのは、LGBTQ+当事者コミュニティが行うプライドパレードのようなイベントではなく、Facebook や Instagram を通して発信される情報のことであった。

Q4の結果は、Very much が8名、Quite a lot が3名、A little が2名、Not at all が1名であ

った。日本では LGBTQ+ を病気や欠損のように考える捉え方が存在しているため、この質問は自然であるかどうかを問うことで深層的な LGBTQ+ への寛容度を図る質問である。Very much と Quite a lot の回答が半数以上を占め、寛容度が高いと考えられる。A little と回答した 2 名は Q3 でも A little と回答しており、追加インタビューでも LGBTQ+ の問題は自分にはあまり関係のないことであるという趣旨の内容を話していた。Not at all の回答者は、神は男性か女性しか作らないという趣旨の内容を話しており、宗教を根拠に LGBTQ+ の人を自然だとは認めることができないということがわかる。

Q5 の結果は、友人や家族・知り合いに LGBTQ+ 当事者がいるという回答が多く、そのほかにもテレビ放送やソーシャルメディア、僧侶という回答があった。

Q6 の結果は、Q6 の結果同様で LGBTQ+ 当事者の友人や家族がいるからという回答が多く半数を占めた。その次に多かったのは自分の宗教上の理由とソーシャルメディアからの情報という回答であった。Q7 の結果は Q6 の結果とほぼ類似しており、初めて LGBTQ+ について知った媒体や方法で LGBTQ+ の人への理解を深めていることがわかる。類似していなかったのは、Q6 でテレビ放送と回答し Q7 で学校教育と回答している 1 名のみであった。

Q7 の結果は、Strongly agree が 3 名、Agree が 8 名、Neutral が 1 名、Disagree が 0 名、Strongly disagree が 2 名であった。Neutral は回答選択肢に含めていなかったが、回答者の意向で追加した。半数以上が同性婚への個人的な意見として賛成しているが、2 名強く反対している。追加インタビューにおいて、Strongly disagree の回答をした 1 名は同性婚が認められるとブータン国内の人口が減少してしまうため反対であると述べている。もう 1 名は、自分の宗教的（仏教徒）な理由から反対していると述べている。この 2 名は、70 代以上の高齢であるという特徴が共通している。

Q8 の結果は、Strongly agree が 4 名、Agree が 10 名であった。Q8 の結果は Q7 の結果とは異なり、全員がブータンでは将来的に同性婚が認められるようになるだろうという想定に肯定的な回答となった。Q7 で Strongly disagree と回答した 2 名は Strongly agree と回答している。その他、Q4 で A little と回答していた 2 名も Agree と回答しており、追加インタビューで行政など多くの人が同性婚について議論しており、LGBTQ+ コミュニティも情報発信をたくさん行っているため、将来的にはブータンで同性婚が認められると考えていると回答している。

以上から、RQ1 は寛容度が高いという結果となった。特に表面的な寛容度は高いが、深層的な寛容度は表面的な寛容度に比べて低いという結果である。

4. 考察

RQ2 の影響要因を分析する。なお、関連が見られなかった項目に関しては記載していない。

宗教と寛容度の関連に関して、宗教の回答が不透明な回答を除き、仏教徒 11 名とキリスト教徒 1 名の回答が有効回答となった。宗教と Q3 の関連は図 1 の通りである。大きな差異は見られない。宗教と Q4 の関連は図 2 の通りである。キリスト教徒の回答が 1 名分しかないので再現性は低い。深層的な寛容度と信仰している宗教には関連があるということがわかる。一方で、先行研究とは異なり仏教徒の方が他の宗教の信仰者よりも寛容度が高いという結果には至らなかった。このような結果に至った原因として、ブータンは仏教徒の割合が高く、キリスト教徒がマイ

ノリティの立場に置かれていることが考えられる。従って、キリスト教徒という立場がマイノリティであることによって **LGBTQ+** というジェンダーマイノリティの存在自体は理解することができるという結果になったのではないかと考えた。

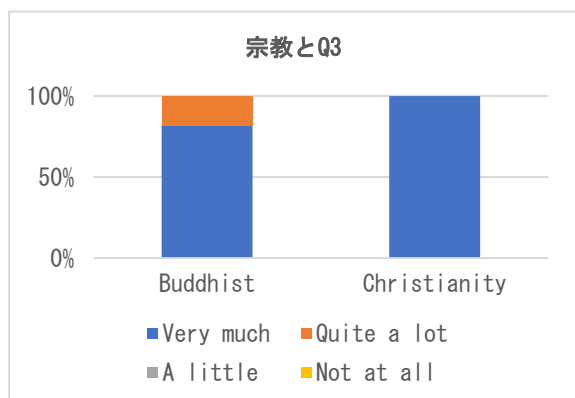


図1 宗教とQ3の関連

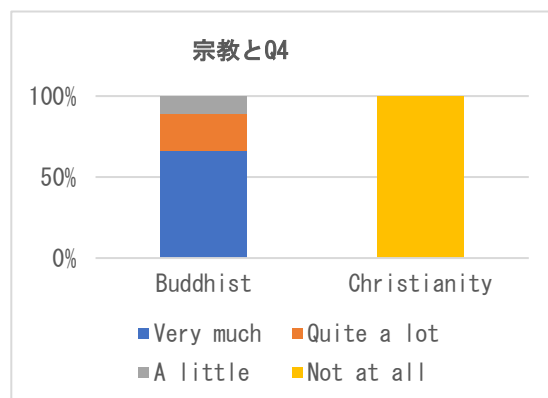


図2 宗教とQ4の関連

ジェンダーと寛容度の関連について、今回の回答では **male/female** の回答しかなかった。ジェンダーと **Q4** の関連は図3の通りである。**Q3** の関連については、どちらも否定的な回答が一つも出ていないため、関連はない。**Q4** との関連については、男性の方が比較的寛容的ではない傾向があると考えられるが、対象者数が少ないため再現性の低い傾向であると考えられる。また、同性婚の賛否に関する寛容度についても、ジェンダーによる回答の傾向は見られず、関連がないと考えられる。

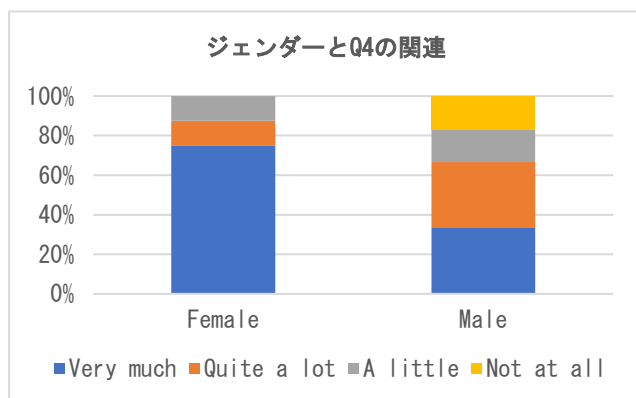


図3 ジェンダーとQ4の関連

居住地と寛容度の関連について考察する。先行研究は地域の人口規模を基準としていたが、ブータンは山の多い国であるため面積に対する人口規模を考慮する必要があると考え、**Thimphu** を人口規模が大きい地域 (A)、それ以外の地域を人口規模が小さい地域 (B) として分析を行った。**Q2** と **Q3** においては地域による差異は見られなかった。居住地と **Q4** の関連に関しては図4の通りである。先行研究の結果とは異なり、**Thimphu** の方が寛容度が低く、その他人口規模の小さい

地域の方が寛容度の高いという結果になった。一方で、居住地と Q7 の関連については、図 5 で示す通り Thimphu の方が同性婚への寛容度が高い結果となっている。このような結果となった原因は、Thimphu の回答者が 3 名であり、その他地域の回答者の回答の幅が広がったことであると考えられる。

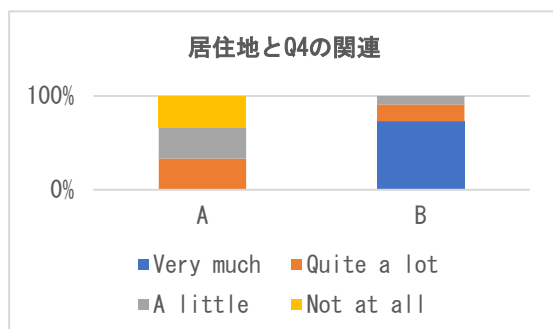


図 4 居住地と Q4 の関連

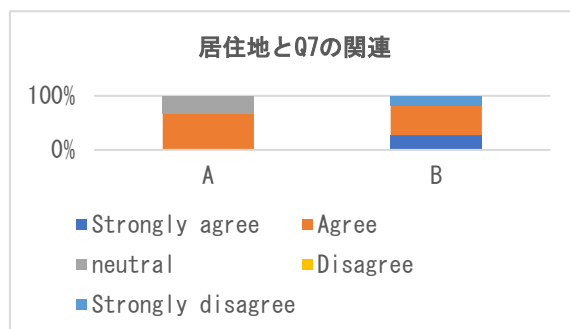


図 5 居住地と Q7 の関連

年齢と寛容度の関連について分析する。年齢は数値化されているため、回答の選択肢も数値化を行って散布図に相関が見られそうな質問項目のみ回帰分析を行う。Q2 と Q3、Q4 については想定に反して散布図のばらつきが大きいため関連がないと判断する。年齢と Q5 の散布図は図 6 の通りである。近似曲線の傾向から、年齢が若いほど同性婚への寛容度が高く、年齢を重ねるにつれて同性婚への寛容度が低くなるように見える。そこで回帰分析を行った。重決定 R^2 が 0.6 以上であるため、有用な回帰式である。P-値は 0.000115034 であり 0.05 未満であるため、有意差が認められる。このことから、同性婚への寛容度は年齢と関連しているということがわかる。ただ、サンプル数が少ないため、再現性には欠ける可能性が否めない。

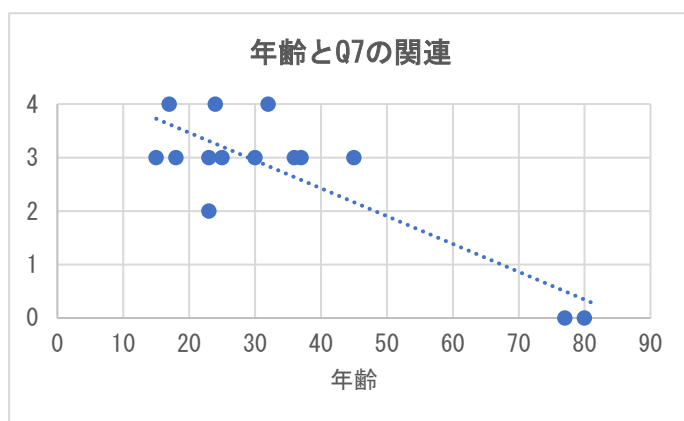


図 6 年齢と Q7 の関連

最後に、LGBTQ+当事者との接触と寛容度の関連を考察する。回答者の半数である 7 名が Q5 および Q6 で LGBTQ+当事者の友人や家族がいると回答している。これら 7 名の回答者はその他 7 名の回答者に比べてすべての質問で寛容度が高い。また、LGBTQ+当事者の友人や家族がいると回答している 7 名は、Q7 を除き選択肢の中で一番寛容度の低い選択肢を選択していない。

このようなことから、先行研究に整合性のある結果となっていると考察できる。

以上の分析より、RQ2はLGBTQ+への寛容度は宗教・居住地・LGBTQ+当事者との接触が影響しており、同性婚への寛容度は居住地・年齢・LGBTQ+当事者との接触が影響しているという結果となった。

5. 調査に参加した感想

今回の調査に参加して、自分の流暢ではない言語でインタビューすることの難しさを感じた。しかし、日本から研究のために来たことや調査内容を伝えると快くインタビューに回答していただくことができ、インタビューをすることに自信がついた。

追加質問において、多くの回答者が年配の人の方がLGBTQ+や同性婚に対して非寛容的な態度であると話していたが、まったく異なる回答結果が出て非常に興味深かった。年配者の同性婚に対する意見としては人口減少という日本での同性婚反対意見と同じ理由が見受けられたが、ブータンの将来としては同性婚を認めるだろうと回答していた。この日本とは異なる傾向には、ブータンの人口構成が関連していると考えた。日本は少子高齢化社会で高齢者が多いため、高齢者の意見の比重が大きい。それに比べてブータンは若者が多く、高齢者の意見の比重はそこまで大きくない。このようなことから、高齢者は若者がブータンを変えるという意識を持っていると考えた。

また、ブータンでは多くの人の意見が制度に反映されるという意識があると考えた。日本では同性婚について長年検討され、ブータンよりもLGBTQ+当事者団体の活動が多いにもかかわらず、同性婚が認められる動きは見受けられない。しかし、ブータンでは政府や多くの人が同性婚について議論しているから・LGBTQ+当事者コミュニティがメディアを通して活発に発信しているから、同性婚は将来的に認められるだろうと考えている人が多かった。このようなインタビュー結果を通して、日本よりもブータンの方が早い将来同性婚が認められるようになるのではないかと私は考えた。

6. 注

- 1) 研究の対象国はアメリカとカナダであるが、この傾向はアメリカのみで有意差が認められた。
- 2) LGBTQ+に関する研究では寛容度、肯定度、理解度など様々な表現が使用されるが、先行研究・及び本研究では同じ意味であると解釈し、寛容度（的）という表現を使用する。

7. 参考文献

- Andersen, Robert and Tina Fetner (2008) "Cohort Differences in Tolerance of Homosexuality: Attitudinal Changes in Canada and the United States, 1981-2000," *Public Opinion Quarterly*, No.72 (2) pp.311-330 (Retrieved February 25, 2023, <https://www.jstor.org/stable/25167627>).
- Sani, Giulia M. Dotti, Cristina Solera, and Mara A. Yerkes (2015) "National Attitudes as a Barrier to European Citizenship Rights? The Case of Parenthood, Partnership and Social Rights across Diverse Family Forms," *Carlo Alberto Notebooks*, No.427 (Retrieved

February 25,2023, <http://www.carloalberto.org/research/working-papers>).

石原英樹（2012）「日本における同性愛に対する寛容性の拡大―「世界価値観調査」から探るメカニズム―」『相関社会科学』第 22 号、pp.32-41。

石丸径一郎（2008）『同性愛者における他者からの拒絶と受容―ダイアリー法と質問紙によるマルチメソッド・アプローチ―』ミネルヴァ書房。

（５）訪問記録

1. JICA ブータン事務所訪問

訪問日時：2月8日（水） 14:00～16:15

訪問先：JICA ブータン事務所

面談者：須藤伸さん(JICA ブータン事務所企画調査員)

JICA ブータン事務所ナショナル・スタッフの皆さん

菊川翔太さん（京都大学大学院生）

概要：

ティンプー市内にある JICA ブータン事務所で、須藤さんからのレクチャーを受けた後、ナショナル・スタッフ（National Staff: NS、ブータン人スタッフ）の皆さんにインタビューを行った。

須藤さんは事前学習や、市ヶ谷のブータン料理屋「LASOLA」などでもお会いしたことがある。ブータン事務所には 11 名のナショナル・スタッフ、9 名の日本人スタッフのかたがおり、他にブータン国内で 6 名の専門家、25 名の海外協力隊のかたが働かれている。また、菊川さんは京都大学の大学院生で、ブータンの農村で調査を行っているかただが、今回は私たちの訪問に合わせて同席してくださった。

JICA が行っていることとして、主に「技術協力」「有償資金協力」「無償資金協力」の 3 つが挙げられる。有償資金協力は利子が付くが、現在のブータンでの有償資金協力はほぼ無利子で行われている。ブータンは無償資金協力が多かったが、2023 年に LDC（後発開発途上国）を卒業する予定のため、無償資金協力から有償資金協りにシフトするとともに、有償資金協力の利子を上げていくことになるようだ。ブータンでの支援内容としては、主に「農業」「インフラ」「保健」の 3 つが挙げられる。農業分野では、商品として売れるようなものを栽培し、市場アクセスを改善することで商品の売買を促進させるような協力を行っている。インフラ分野では橋の建設などが行われている。農業やインフラに比べて開発が遅れている保健分野は、今後特に力を入れる必要がある分野だという。

ところで、日本はなぜブータンの開発に協力するのだろうか。日本はブータンに対し、技術協力で 252 億円、有償資金協力で 90 億円、無償資金協力で 42 億円の投資を行っている。このような日本の積極的な姿勢の理由として、須藤さんは「国際協力は国家間、国民間の友好関係の基盤となるからだ」と話す。事実、2011 年の東日本大震災後のブータン国王の演説内容や、ブータンでの日々の生活の中で、ブータンの人々が日本に好意を持っていることが感じられるという。

須藤さんはブータンや他国を学ぶ意義を、キャリア形成や自分自身の考え方への影響という観点から語ってくださった。須藤さんは他国を学ぶ意義として 2 つの点を指摘した。1 つは「社会を学ぶ／知見を広げる」こと、2 つ目は「自分を知る／置き換えて考える」ことだ。須藤さん自身のブータンとの出会いは、今回の私たち同様にスタディツアーに参加したことがきっかけだ。そのスタディツアー中、須藤さんは「若者の職業選択」をテーマにブータンでの調査を行っていた。その中で、ブータンでは人材不足で働き手を求めているのにも関わらず、失業率が高いという矛盾を抱えていることを知ったという。それはブータンでの急激な高学歴化に伴い、オフィス

ワーカーを目指す人が増え、職業のミスマッチが生まれていたことが原因だった。こうした急激な変化から、須藤さんは「職業選択にはなんらかのバイアスがかかっていること」に初めて気が付いたという。しかし、このような現象は日本や他国でも起こっている。このことから、須藤さんは「他国は自分を映し出す鏡になる」と結論付けた。つまり、当たり前前の社会現象について、ブータンという国を通して知ることができたということである。

須藤さんのレクチャーを受けた後、それぞれの研究課題について、ナショナル・スタッフにインタビューを行った。ナショナル・スタッフは日本語を話すことができないため、会話はすべて英語で行われたが、筆談などを交えつつお話を伺い、各々が良い学びを得ることができた。

コメント・備考：

今回のスタディツアーでは、開発途上国とは何かという点について多くの学生が疑問を持っていた。それは、ブータンで暮らす人の精神的な余裕や豊かさ、そこでのゆっくりとした時間の流れを体験し、「幸せとは何か」について考えを巡らせたからである。このような体験を踏まえ、ブータンの2023年「LDC卒業」が何を意味するのか、開発途上国と先進国の違いは何なのか、という問題に関しては私たち自身にも疑問が残っている。これは今すぐに答えの出せるものではないが、今後の授業や日々の生活の中で自分なりの結論を探していく必要があるだろう。

担当者：田村 彩佳

2. JICA ブータン事務所職員の方々との交流会

訪問日時：2月8日（水） 19:00～21:15

訪問先：Folk Heritage Museum Restaurant

面談者：山田智之さん（JICA ブータン事務所長）

須藤伸さん（JICA ブータン事務所企画調査員）

井本佳宏さん（JICA ブータン事務所企画調査員）

須藤みのりさん（元 JICA 海外協力隊員）

概要：

2月8日午前中に訪問した JICA ブータン事務所の職員の方々との交流会。実際にブータンを訪れた感想や各自の研究の進捗度合い、今後の研究の相談やブータンの居住経験を通じた発見などについて意見を交わした。食事はブータン料理で、スジャ（バター茶）やザウ（お茶請け）から始まり、ケワダツィ（ジャガイモのチーズ煮込み）などが提供された。

質疑応答の内容：

Q. ブータンに住んでいて、許せないこと・不満なことはあるか。

A. （ティンプー居住者）基本的にはない。人も温かく、治安も良い。ひとつ不満な点を挙げるとすれば、居住者であっても基本的にはルート・パーミットが必要になることである。ルート・パーミットとは、他の地域に移動する際に必要な移動許可のことである。ブータン人ではない他国

の労働者などは数日前までに政府にルート・パーミットを申請して許可を得なければ、ティンブーやパロから出ることができない。日帰りの観光であっても気軽に地域の外に出れないのは不満である。

A. (ティンブー居住者) 4 ヶ月住んでいて不満に感じたことは今のところない。

Q. ブータンで COVID-19 の影響で変化したことはあるか。(コロナ禍以前のブータンに訪れたことのある人に対して)

A. (コロナ禍以前のブータンに訪れたことのある人) 建物の外見の変化やティンブー市内の道路に変化があった。パロ空港はコロナ禍の3年間で改装工事が行われており、外装も内装も変化している。ティンブー市内は、店の移り変わりに加えて、道路の衛生環境が変化している。特に、ドマによる路上や壁の汚れが減っており、ドマの赤い汚れを見ることが減った。

A. (コロナ禍以前のブータンに訪れたことのある人) ティンブー市内のロックダウンが生活に大きく影響を与えたということを見聞したことがある。ロックダウンによって市内が多く的小区に分けられ、移動が大きく制限された。区画の境界にはデスツプ(オレンジ色の服を着た取り締まりのボランティア)が立っており、居住によって定められた区画を跨ぐ移動ができず、区画を越えて買い物をすることができなかった。

Q. ブータンは女性が強いと言われるが本当なのか。

A. 本当である。ただ、強いという意味合いは様々である。ブータンでは、特にパロの女性が強いと言われている。この際の強いという意味はマイナスな印象を含んでおり、気が強くケチであるという特徴がある。パロに加えてハの女性も同じようにマイナスな印象の強い女性と言われることが多い。しかし、このマイナスな印象で語られる強い女性たちだが、実際に接してみるとしっかりと自立した性格である。必要以上にマイナスな印象を持たれているのではないだろうか。

Q. 近年のブータンの国の傾向についてどのように感じているか。

A. 近年、人の管理の強化が進んでいるように感じる。ルート・パーミットだけではなく、IDの電子化なども進み、特に人の移動の管理が強化されているのではないかと。

A. ゾンカ語の国内の立ち位置が変化していると感じる。ブータンの公務員試験の受験にはゾンカ語の習得が必須であるが、英語教育の推進により、ゾンカ語が日常的に使用する言語ではなく学校の授業での学習のみとなる人も増加している。新聞のゾンカ語使用に関する規制も減り、日常的にゾンカ語に触れる機会が減っている。そのため、ブータンで安定した職である公務員という仕事の足切りがゾンカ語の習得になってしまっている。

考察：

ブータン居住者のブータン人の国民性に対する不満が少なく、ブータンは日本人が居住しやすい国であると考えた。政府のルート・パーミットや観光税の引き上げに対する不満はあるようだが、仕事や日々の生活で接するブータン人の習慣に対する不満はまったくといってよいほど挙げられなかった。居住環境は日本とは大きく異なるが、米が主食で治安がよいブータンは居住し

やすいようだ。ブータン人の日本人への悪いイメージがないことも、日本人がブータン人を温厚であるとする理由のひとつであるとする。ブータンでは JICA の国際協力を通じた日本の好感度が高く、日本人への待遇が良い。このようなことを通して、日本人のブータン居住者の不満は少ないのだと考えた。

コメント・備考：

この夕食会がブータンで初めての大人数での食事だった。そのため、スジャとザウが提供されてから長時間メイン料理が提供されないことや、大皿を回して自分の皿に料理を盛り付けるブータンの食事方式に驚いた。面会者の方々はブータンの他にも多くの国に訪れた経験があり、他国とブータンを比較しながらブータンの特徴を話してくださったため、ブータンの特徴を多角的に学習する良い機会となった。

担当者：石田 優花

3. ゾンカ開発委員会訪問

訪問日時：2月9日（木） 9:10～10:10

訪問先：ゾンカ開発委員会

面談者：ナムゲイ・ティンレイさん（ゾンカ開発委員会計画局長）

概要：

ゾンカ開発委員会（Dzongkha Development Commission: DDC）へのインタビューを通して、ゾンカ語を国内に普及させるための具体的な政策や、ゾンカ語がどのように国民に認識されているのかを知った。

質疑応答の内容：

①ゾンカ語をブータン国内で広めるために行っている具体的な政策は何か。

→特にゾンカ語教育を面白く、学びやすいものにしようとする政策を行っている。具体的には、絵本や漫画といったライトなものからゾンカ語学習を楽しいと思ってもらえるようにしている。また、ゾンカ語をブータン唯一の公用語としているため、市民権を得るためには最低限ゾンカ語の Writing か Speaking ができなくてはいけないことになっている。また、ゾンカ語プロモーションのための広報誌を出したり、SNS アカウントを運用したりしている。

②英語が広まっていく中で、どのように若い世代にゾンカ語の重要性を伝えていくか。

→若い世代は娯楽のほとんどが英語なのでどうしても英語が広まってしまう。しかしゾンカ語が国家のアイデンティティの根幹であることは確かだから、教育をやめることはできない。学ぶ機会をコンスタントに提供し続け、より魅力的なものにすることが重要。

③ゾンカ語を話せることはブータン人であるうえで必要不可欠であるか。

→市場やゾンなどの施設ではゾンカ語が当たり前で、行政手続きなどもゾンカ語、国内の重要ポジションにつくには流暢なゾンカを話せる必要があるという現状があるため、話せなくてはブータン人ではないという訳ではないが、若干の社会的プレッシャーはある。

④ブータン人のアイデンティティを形成するゾンカ語以外の要素はあるか。

→ゾンへ通うこと、民族衣装を仕事や儀式的時に纏う、伝統音楽や舞踊。

⑤ゾンカ語の国際的な地位を確立するためにどのような施策が行われているか。

→そもそもゾンカ語話者が少ないため、国際的な地位を確立しようという段階にまでいっていない。まずは国内にゾンカ語を浸透させる必要がある。

考察：

最も強く印象に残ったのは、DDC という立場にも関わらず③の質問に対して想像以上に寛容な回答をしていたことである。それまでのインタビューの中でゾンカ語を学び、話すことはブータン人として必要不可欠であると回答する人が多かったため、ゾンカ語を積極的に広めていこうとしている立場の人が、ゾンカ語を話せないことに対して寛容であったことが意外だった。実際すでに現在のブータンにはゾンカ語教育が浸透しており、まったくゾンカ語を話せない人というのが存在していないため、このような回答になったのかもしれないが、ブータンで市民権を得るには最低限ゾンカ語の **Writing** か **Speaking** ができなくてはならないとしながらも、ゾンカ語を絶対条件とは考えないということは、精神的にブータン人であることと公的にブータン人であることには違いがあるということなのかもしれないと考えた。そして、ゾンカ語を話せることは、精神的にブータン人であることの条件としては優先順位がそこまで高くないのではないだろうか。このようなゾンカ語と個人のアイデンティティとナショナルアイデンティティの関係性が、今回のインタビューから見えてきた。

コメント・備考：

DDC のエントランスにあった「A Nation Stays Alive When Its Culture Stays Alive」という言葉がブータンという国をととてもよく表現しているなと感じた。

担当者：今野 春子

4. ティンプー市役所訪問

訪問日時：2月9日（木） 10:20～11:00

訪問先：ティンプー市役所

面談者：ウゲン・ツェワンさん（ティンプー市役所職員）

ケザンさん（ティンプー市役所職員）

概要：

①ウゲン・ツェワンさんによるプレゼンテーション

ティンブー市役所環境部の基本情報及びごみ回収方法等についての説明。

②自身が用意したインタビューに関する質疑応答等

詳細は下記の通り。

質疑応答の内容：

インタビューでは、「国民の良好で向上的な衛生意識がごみ問題解決に繋がる」ことを前提に、行政側がどのようにごみ問題、特に環境教育に関する政策を重視しているのかを聞き出すことがねらいだった。そこで、JICA との事業の中でも特に環境教育が推し進められたという 2017 年から 2021 年の事業について、どのような成果が得られたのか質問した。しかし、先方の回答の様子から、環境教育を現場レベルで担っているのは政府よりむしろ JICA である割合が高く、ごみ問題については“分業”体制が採られているようであった。

次に、政府が「2030 年までのゼロ・ウェイストの実現」に向けて公務員に義務付けた「ゼロ・ウェイスト・アワー・イニシアティブ」の効力について質問した。回答は明快で、公務員は毎月 2 日に 1 時間、清掃をする習慣が課されており、もはや生活の一部になりつつあるとのことだった。ケザンさんによると、人々の意識を変えることは難しいが、こうした活動を通して徐々に浸透させていきたいとのことだった。

考察：

第一に、ブータン王国ティンブー市におけるごみ問題は、主に JICA と民間会社が担っていることが分かった。ごみ回収については、民間の収集会社（グリーンウェイ社、クリーンシティ社）が中心的な働きをしており、ティンブー市役所環境部はその組織的な統制を図るためにある機関だと理解できそうである。

第二に、ごみ問題に関する市民の教育について、市行政が介入できる余地はまだ残されていると考えるに至った。例えば、家庭内におけるごみ分別の推奨や川沿いに設置されていたごみ捨て場（ごみ箱）の改良など、マクロな廃棄物処理の問題のみならず（もちろんそれも重要ではあるが）、同時により市民の生活目線に立った政策を推し進める必要があるのではないだろうか。

コメント・備考：

先方の事情により、予定していたティンブー市長へのインタビューを行うことができなかった。ただし、この前日に実現した JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへの取材を通して、JICA 側のごみ問題に対する認識を伺うことができた。

また、ごみ問題について精力的に活動しておられる現地ガイドのかた（Gyambo Nb さんら）がいるとの情報も得ており、今後彼の活動についてインタビューができないかコンタクトを取っているところである。

担当者：安藤 承子

5. ブータン日本語学校訪問

訪問日時：2月9日（木） 14:00～16:30

訪問先：ブータン日本語学校

面談者：青木薫さん（ブータン日本語学校校長）

ソナム・ワンモさん（ブータン日本語学校の学生）

ビムラ・グルンさん（ブータン日本語学校の学生）

タシさん（ブータン日本語学校の卒業生）

タンディン・ワンチュクさん（ブータン日本語学校の卒業生）

概要：

それぞれの名前を耳で聞き取り、正確にひらがなで書けるかディクテーションを兼ねた自己紹介をした後、事前に募った日本人学生からの質問・日本語学校の学生からの質問についてホワイトボードを用いながら回答した。さらに、日本人学生の研究の一環として、3～4名のグループに分かれ、インタビュー調査やアンケート調査、意見交換を行った。

質疑応答の内容：

日本人学生から日本語学校の学生への主な質疑応答は次の通りである。「どうして日本語を学ぼうと思ったか」に対して、「夫が日本で働いており、自分も日本で暮らすことになったから」、「日本で友達が暮らしており、遊びに行ったときに日本語ができると便利だから」との回答が得られた。「ブータンで流行っている若者文化について教えてほしい」という質問には、k-pop やスパイファミリー、鬼滅の刃、そしてインスタグラムが挙がった。「ブータンのどんなところが他にはない魅力だと思うか」に対して、学生たちが口をそろえて「食べ物が辛いところ」と言っていたのも印象的だった。他にも、各自の研究テーマに関連した質疑応答にも丁寧に、話し慣れない日本語を一生懸命使って回答する姿を見て、学問に取り組む者としての大事な心構えに気付かされたように思う。

次に、日本語学校の学生から日本人学生への質疑応答を示す。日本の大学の数や人気のある学部、お茶の水女子大学についての質問から始まり、日本に住む留学生にまつわる質問も多かった。中でも、「ブータンの印象はどのようなものか」に対し、日本人学生それぞれが「時間がゆったり流れている」、「人が温かい」、「目が合うとブータンの人はにこりと笑ってくれる」など、ブータンに来てみての率直な感想をゆっくりはっきりと、日本語学校の学生に伝わるように生き生きと述べていた。どの質問に対しても、日本特有の文化や考え方が感じられたようで、日本語学校の学生は興味深そうに耳を傾けていた。

考察：

最初に行った自己紹介では、青木薫校長から日本語の聞き取りにくい発音や特徴について説明があり、日本語学習者に日本語を話すときに留意すべき点を学ぶことができた。全体を通して、文化や人々、社会制度など、お互いの国について理解を深めることができたのはもちろんだが、ブータンでは圧倒的マイノリティの日本人として旅程を過ごしてきた日本人学生にとって、日本

語を懸命に学んでいる学生に会い、コミュニケーションが取れたことは何物にも代えがたい喜びの体験であった。また、日本語学校の学生の質問に回答するとき、改めて自分たちが生まれた日本という国について考え、知ることができた。今回の交流を通して日本とブータンの両国をいろいろな視点から客観視できたことも貴重な経験となった。

コメント・備考：

青木薫校長の気さくでほがらかな人格に助けられ、終始にこやかに交流を進めることができた。言語の壁はあってないようなもので、伝えたい・知りたいという気持ちで相手に真剣に向き合うことが、異文化交流の真髄であることを実感できた。また、日本語学校訪問後のティンプー市内散策にも日本語学校の学生が同行してくれ、本や論文の中には書かれていないような、距離感が近いから聞けるありのままのブータンのあれこれについて知ることができた。今度、もし日本語学校の学生が日本に来たら私たちが全力でサポートしたいと思う。彼・彼女らが日本にやって来たときに恥ずかしくないように、日本という国についてもう一度考え、自分が国をよくするためにできることをしたいと強く思った。

担当者：山本 愛理



交流の様子



日本語学校の皆さんとの集合写真

6. ペマ・ロセルさんとの交流会

訪問日時：2月9日（木） 19:00～21:00

訪問先：Singapore Chicken Rice Corner

面談者：ペマ・ロセルさん

概要：

現地旅行会社（Bhutan Delight Tours & Treks）の社長であるペマ・ロセルさんにお話を伺った。ペマ社長はティンプーで働かれている。今回のスタディツアーにアシスタントとして同行してくださったチミ・ドルジさんと同じ会社である。

お土産として、全員にブータンらしい柄の小物入れをくださった。

夕食会では、ガイドのペマ・ワンチュクさんが、ブータンの伝統的な楽器であるダムニエンを

演奏し、さまざまな歌を披露してくださった。ダムニエンには7つの弦があるが、これはブータン特有のものであるという。

ペマ・ワンチュクさんが伝統的な歌に込められた意味を教えてくださいましたので、いくつか紹介したい。

「コケッココーの歌」は、鶏の歌である。ある商人が、鶏のくちばしは鉛筆に見えるから売れると思い、また、鶏の鶏冠は帽子に見えるから売れると思ったが、それに対して鶏が、どちらも大事なものだから売らないでと訴えているという歌である。

「ミルクの歌」は、心はミルクのように真っ白にしなければならない、という教訓が込められた歌である。たとえミルクをこぼしてしまったとしても、ミルクは何にも染まらず真っ白でいることから、自分も、何があっても真っ白な心でいなければならないという教えが込められている。

考察：

ブータンの伝統的な歌には、教訓や教えが込められていることが分かった。日本の童謡にも、子どもに対する教育的なものがたくさんあるので、同じだと考えた。

コメント・備考：

お忙しい中、時間をとってくださったペマ・ロセルさん、ペマ・ワンチュクさんに感謝している。

担当者：鈴木 満央

7. キリスト教の教会訪問

訪問日時：2月10日（金） 9:00～10:00

訪問先：キリスト教（ペンテコステ派）の教会

面談者：ロシャンさん

概要：

仏教国であるブータンにおいて、キリスト教の信者たちはどのようなアイデンティティを抱いているのかを知るために訪問させていただいた。教会内を一通り見せてくださった後、各自のインタビューにそれぞれ答えてくださった。

質疑応答の内容：

代表して執筆者のインタビュー内容を記す。面談者のロシャンさんはこの教会のリーダーの1人であるという。元々はキリスト教徒ではなかったが、幼い頃お父様が病気を患い、救いを求めていた頃にキリスト教に出合ったという。今では家族全員と親戚の数人が信者である。キリスト教の信者は年々増えている。国民の多くが仏教徒であり、仏教に由来する慣習も多くあるが、慣習は慣習であり宗教とは別に考えて従っている。たまにキリスト教と仏教の宗教観の違いから難しさを感じることもある。聖書は英語のみならずゾンカ、シャシヨップ、ローツァ

ンパの言語にも翻訳されている。キリスト教はブータン南部で信者が多く、信者の 80%を占める。その理由として、インドやネパールから宣教師が入ってくる影響があるとおっしゃっていた。ロシャンさんも母語はローツァンパだった。ブータン人ならば仏教徒でなければいけないわけではなく、国王は宗教の自由を認めてくださっている。ブータンの人口の 5~10%がキリスト教徒であるという。この協会は、ブータン国内に数多くある教会の大元(mother church)である。国王とイエス・キリストの位置付けとして、神であるイエスが第一で、彼が任命したのが国王であるという考えだった。

考察：

ブータン人として必要な要素は何か尋ねると、国王・国・国民に支えること、よりよいことのために祈ること、文化を守ることとおっしゃっていた。日常的にゴを着用し若者にもより頻繁に着用してほしいと思っている、ブータン人なら人生の大半をブータンで過ごしてほしいと思っているなど、強い民族的ナショナルアイデンティティを持っていた。キリスト教とブータン人としてのアイデンティティを、自分なりに融合させながら強固なアイデンティティを確立していた。ブータン南部に信者が多い点に関して、キリスト教が取り残された人々の拠り所として機能している側面があるのではないかと考えた。

コメント・備考：

仏教国ブータンのキリスト教の教会と聞いて抱いていたイメージとはまったく違っていた。外部からは教会だとはわからなかったが、部屋の中にはキリスト教にまつわる多くの絵や写真が飾られており、写真も自由に撮ってくださいとおっしゃってくださるような、意外にもオープンな雰囲気だった。ロシャンさんが国民として国王・法律に従うといった市民的ナショナルアイデンティティだけでなく、ブータン人として非常に強い民族的ナショナルアイデンティティを抱いていたことも意外だった。マイノリティとしてのキリスト教徒、というイメージがあったため、「ブータン人」らしくないかたを想像していた。非常に興味深いインタビュー結果が得られた。

担当者：リップル アメリ

8. 高地牧畜民へのインタビュー

訪問日時：2月10日（金） 15:20~16:00

訪問先：プナカ・ゾン前

面談者：ラヤとルナナの高地牧畜民の方々

概要：

まず、ラヤの高地牧畜民の 63 歳の女性からお話を聞くことができた。夏は 4,000m の地点（ラヤ）で生活をしている。山にはヤクが約 60 頭おり、乳搾りなどをして生活をしている。冬はプナカで、夏に備えてお米の栽培をしている。山では農薬を使わないが、プナカでは使っているとい

う。また、プナカでは田んぼにテントを張って生活している。移動は馬 8 頭と共に行い、昔はラヤの村まで 2 日間かかっていたのが、今では半日で行くことができる。ラヤの言語はゾンカ語で、チベットから買ってきた羊毛でできた服を着ている。触らせてもらったが、厚みと重みがあって、保温効果がありそうだと感じた。また伝統的な帽子をかぶっていて、私も被らせてもらった。現在それを作る人は 1 人しかいないそうだ。仏教を信仰しており、毎日お経を唱えているという。ブータンの人は病気など大変な時に助けてくれるところが好きだそうだ。

次に、ルナナの高地牧畜民のかたから話を聞くことができた。ルナナは映画『ブータン 山の教室』(Lunana: A Yak in the Classroom) の舞台となった地だ。ルナナの人々は比較的裕福であり、ルナナ＝プナカ間もヘリで移動するという。ヘリは 4 人乗りでチャーターすると片道 5 万 2,000Nu (約 8 万 3,200 円/1Nu=1.6 円で計算) らしい。今 (2 月 10 日) はプナカに来て 4 ヶ月経っていて、もうすぐ行われるお祭り (プナカ・ドムチェ) を見てから帰るという。昔はルナナへ歩いて 1 週間かかっていたが、近年はヘリを使うことができるため楽になったそうだ。ルナナが裕福な理由のひとつに、冬虫夏草がとれるということがある。裕福であるため、プナカでもアパートを借りて住んだり、家を買ったりする人が多い。

質疑応答の内容：

Q. 地球温暖化などの環境変動の影響を感じる場面はあるか？

A. 昔はたくさん雪が積もっていたが、今は地球温暖化の影響で積もらないことが多い。

考察：

同じ高地牧畜民の中でも、裕福さに違いがあり興味深かった。特に、裕福とされているルナナの高地牧畜民のかたは、若々しさや身だしなみ、身につけているアクセサリーからも生活に余裕があるように感じられ、印象的であった。

また、地球温暖化などの環境問題が、高地牧畜民の生活圏にも影響を及ぼしていることに危機感を持った。自然との関わりが強い高地牧畜民の生活を脅かさないためにも、環境問題を解決していかなければいけないと考えた。

コメント・備考：

生活について詳しく教えてくださったラヤとルナナの高地牧畜民の方々に、心から感謝している。

担当者：鈴木 満央

9. ファブラボ CST 訪問

訪問日時：2 月 11 日 (土) 11:15～13:00

訪問先：ファブラボ CST

面談者：山田浩司さん (JICA 専門家)

大野勉さん (日本開発サービス調査部主任研究員)

概要：

王立ブータン大学科学技術カレッジ構内のファブラボ CST を訪問し、技術協力専門家の山田さんからお話を伺った。前半は世界中のファブラボの概要やブータンにある6つのファブラボの特徴、ファブラボ CST での活動例についてプレゼンテーションを行っていただいた。後半は施設の見学をし、過去の作品を拝見した。過去の作品は、木材を使用した宗教関連の作品や、オフィスの便利グッズ、子どもが作成した生活用品や遊び道具などがあった。

質疑応答の内容：

Q. 長期休みに行うものづくりプログラム参加者の子どもはどのように募集しているのか。

A. Facebook での情報発信や知人の学校教諭への募集依頼などである。施設内の設備は限られているため、1回のプログラムで多くの子どもが参加することはできない。そのため、プログラムの実施回数を増やすことで多くの子どもが参加できるようにしている。

Q. なぜ大学構内に設置されているにもかかわらずプログラム参加者は大学生未満の子どもがメインなのか。

A. 大きく分けて2つの理由がある。1つ目は、子どもの長期休みの居場所支援である。プンツォリン地域では共働きの世帯が多く、長期休みに子どもを預ける場所が不足している。ファブラボ CST ではそのような子どもが長期休みを有意義に過ごす機会として、子どもを対象としたものづくりプログラムを開催している。2つ目は、COVID-19の影響で子どもたちが取り残されたという感覚を持たないようにするためである。プンツォリンではコロナパンデミックの影響で子どもたちの学習が遅れ、政府に取り残されたという感覚を持っている人がいるため、子どもを対象としたプログラムを行なっている。

Q. 颯ラーメンに設置されているティッシュボックスはファブラボの作品なのか。

A. 違う。ファブラボではそのような作品を商業作品として販売した記憶はない。しかし、作品自体はファブラボ出身者が製作したものである。

Q. なぜ5Rシールが壁に貼付してあるのか。

A. 廃材を減少させるためである。シールの貼付されている付近の木材加工機械に端材が放置されていることがある。端材は放置してしまうと廃材になってしまうため、使用者の木材への意識を変えるべく5Rのシールを貼付している。

考察：

ファブラボ CST への訪問を通して、山田さんのファブラボに加えてブータンへの熱い情熱を感じた。さまざまな試行をしてファブラボ CST をブータンの地域開発に活かそうとしていることがわかったが、山田さんはブータンに来た当初はものづくりの専門家でもなくブータンの専門家でもなく、日々の積み重ねで現在のような大きな成果が生まれるということがわかった。

担当者：石田 優花

10. 山田浩司さん・大野勉さんとの交流会

訪問日時：2月11日（土） 19:00～21:20

訪問先：Kampai Kitchen

面談者：山田浩司さん（JICA 専門家）

大野勉さん（日本開発サービス調査部主任研究員）

概要：

同日の昼間にファブラボ CST でお話を伺った山田さんと大野さんと、プンツォリン市内にあるレストランで交流会を行った。プンツォリンはブータン南部の街であり、インドと国境を接している。山田さん、大野さんは現在ブータンで最も南にいる日本人だ。プンツォリンには日本人が減多に来ないためか、私たちの訪問をととても喜んでくださり、ナショナルデーの文字が刻印された木材のプレートをプレゼントとして用意してくださった。プンツォリンにはインド人、ネパール人以外は外国人はほとんどいないらしい。しかし、近年はシンガポール人が増えてきており、今後も増えていく見込みだという。

質疑応答：

近々ブータンが世界ファブラボ会議のホスト国となることが決まっているようだ。山田さんは、ブータンが国際ファブラボ会議のホスト国となっても、人々はプンツォリンには興味を示さずティンプーのみに滞在し、そのまま自国へ帰ってしまうだろうことを悩んでいるようだった。そこで、山田さんから「プンツォリンを有名にするためにはどうしたらいいのか、プンツォリンの特徴は何か」という質問を受けた。お茶大の学生からは、「プンツォリンは多様性のある街が特徴的」「プンツォリンは COVID-19 の影響を他よりも強く受けた場所なので、そのような負の側面を紹介するのはどうか」などといった意見が出た。

考察：

山田さんは「ブータンの外側の人、海外の人からの思いがけないソリューション」を期待されており、日本人としてブータンにどのようなアプローチができるのかについて常に考えていらっしやることが感じられた。また、ブータンで有名なビールのひとつである「イレブンサウザンド」の缶、麦、水はどこで製造されているのかなど、ブータンやその周辺国の製造品に詳しく、ファブラボの一員として、「ものづくり」について日頃から真摯に向き合う姿勢が見て取れた。

コメント・備考：

昼間にファブラボ CST を訪問した際は、主にファブラボについてのお話を伺ったが、夕食会ではファブラボのみならず、ブータン全般やインドなどについてもお話を伺えた点が良かった。

担当者：田村 彩佳

11. ホームステイ

訪問日時：2月12日（日） 15:20～2月13日（月） 9:50

訪問先：チェンチョさん宅

面談者：チェンチョさんご一家

概要：

ホームステイを通してブータンの人々の暮らしを体験した。近くのホテルまで歓談しながら散歩に行ったり、チェンチョさんの自家製料理を皆で食べたあと石風呂に入ったり、子どもたちと全力で遊んだり、ダンスと一緒に踊ったりと思ひ思いに学生たちはホストファミリーとの一時を過ごしていた。インタビュー調査など、自身の研究活動も同時に行った。

質疑応答の内容：

研究活動はもちろんのこと、食べ物、洋服、通っている学校や家族関係まで、学生は疑問に思ったことをその都度ホストファミリーに質問していた。英語が話せずゾンカ語でしかコミュニケーションが取れない人も少なくなかったが、ガイドの力を借りながら、聞いた内容を絶対に漏らさず吸収しようという姿勢で学生たちは全力で向き合っていた。インタビュー調査の際には使わないような、日常の英会話を聞いたり話したりできたことは貴重な経験であった。

考察：

ホストファミリーのどこまでも広い心と優しさにどっぷりと浸かることができた有意義な時間であった。ブータンでは家庭内で男性よりも女性の方が上の立場にあるという話を聞いていたが、実際に訪問したお宅でも女性が快活に大きな声で話し、笑い、一家の主導権を握っている一方で、男性陣はおとなしく、女性たちに従うという構図が見て取れ、興味深かった。しかし、家族間の絆はとても強い。チェンチョさんの父親は、25年間の瞑想の旅に出ていたそうで、それに対して家族は反対しなかったのか質問すると、「妻は自分を25年間、文句を言わずに支え続けてくれて、好きなように修行させてくれた」と話していた。奥様ご本人も、「夫が瞑想の旅に出ると決めたなら妻は応援するしかない。家を守る役目がある」と述べていた。お互いの信頼が余程深くなければ25年という果てしない月日を耐えることはできなかっただろう。また、居間には薄型テレビがあり、家族1人1人がスマートフォンを持つなど、電子機器が一般家庭でも普及している事実を実際に目にすることができた。高校・大学生の娘たちはk-popが大好きで、学生たちと長時間にわたってお気に入りの音楽に合わせてダンスを踊って楽しんでいたことも驚きであった。その一方で、学生のために用意してくれた石風呂は完全に手作業で石を焼き、その熱で水からお湯を沸かすもので、一切科学技術に頼っていなかった。できたとしても、すべては機械化しないというような、暗黙の区別がされているのかもしれない。

コメント・備考：

ホームステイを通して、ホストファミリーとの仲が深まるとともに、実習に参加した学生同士の心の距離も大きく近づいたように思う。ホテルでは感じられないアットホームな雰囲気は感化

され、様々な体験を共にしながら、ある意味家族のような関係になれたのではないだろうか。旅程の中間地点でホームステイを経験し、チームとして団結できたと思う。歓迎してくれたホストファミリーの皆さんに感謝したい。

担当者：山本 愛理



料理を作るチェンチョさん



各自の研究活動の様子



チェンチョさんの自家製料理



ホストファミリーとの集合写真

12. 西岡ミュージアム

訪問日時：2月13日（月） 10:10～11:10

訪問先：西岡ミュージアム

面談者：浅田瑠理さん（JICA 海外協力隊・野菜栽培／8ヵ月目）

花里さくらさん（JICA 海外協力隊・マーケティング／4ヵ月目）

概要：

ダショー西岡が最初に開拓したボンデ農場を中心に、農業機械の研究や農産物加工の研究施設、種苗センターなどの農業開発機関が集合している。2014年にダショー西岡着任50周年を記念してミュージアムが設立された。ダショーのブータンでの功績をDVDや写真などを通じて知ることができるになっている。

質疑応答の内容：

多くのブータン農家は農業のやり方を変えることに抵抗があり、これまでどの国が来てもあまり成果が得られなかったため、政府の信頼も得られずあまり良い対応は受けられなかった。しかし、小さなボンデ農場から少しずつ農地開発を行い、信頼を獲得していく。野菜の種類が少なかったブータンで、大根やキャベツが何であるかを教えるところからスタートし、収穫した後も、なぜ曲がったか、ツヤをどう出すかなど細かなところを教え込んだ。そのようにして若者中心に巻き込んでいくことに成功し、シェムガン地方の開拓を任せられる。元は焼畑中心だったところを、生産性の低い高地から移住して生産性の高い低地を開拓するよう説得して周り、定住と開墾を促す。これに成功し、その功績がブータン側に大きく評価され国王よりダショーの位を与えられた。パロに戻った後は、以下のことを優先して行った。

- ・ 農業機械化の促進
- ・ 種子、種苗の生産向上と配布
- ・ 食品加工部門の設立
- ・ インドとバングラデシュへの農作物の輸出着手、促進

その後は JICA を通じた日本の援助により缶詰製造機を手に入れて、キノコやアスパラガス、トマトソース、リンゴと桃のジャムをボンデ農場で製造した。

西岡ミュージアムの奥には、農業が機械化される前の農業器具が設置されている。多くが昔の日本の農業器具と類似している。

- ・ 唐辛子を粉にする挽臼
- ・ 牛に引かせて土地を耕す器具
- ・ 土を慣らす器具
- ・ とうもろこしを粉にする石臼
- ・ バター茶をつくる筒

考察：

ブータンに滞在していて最も不思議に思ったのは、日本人や日本という国に対してブータン人があまりに好意的である点であった。街中で声をかけられたり、日本語で話しかけてきてくれたりするだけでなく、プンツォリンの川辺で子どもたちがわざわざ一緒に写真を撮るためだけに追いかけてきてくれたのには本当に驚いた。その親日的な雰囲気の原因のひとつであるダショー西岡の功績をこのミュージアムで確認したことで、西岡がどれだけ大きな変化をブータンにもたらしていたのかを理解することができた。元々西岡については少し学んでからこのスタディツアーに参加していたものの、実際のブータン人の反応と合わせて改めて西岡の功績を振り返ってみると、農業の変化とそれに伴う食文化の変化が、現代に至るまでブータン人にポジティブに受け取られていることが分かった。

コメント・備考：

訪問記録に何度も登場する平山先生を探すのが楽しかった。

担当者：今野 春子

13. 伝統舞踊の元踊り手へのインタビュー

訪問日時：2月13日（月） 12:30～14:00

訪問先：RAPA 元団員のゲンボさんのお宅

面談者：ゲンボさん

概要：

ゲンボさんは、RAPA（Royal Academy of Performing Arts）という王立の伝統舞踊団に1976年に15歳で入団し、1993年に引退するまで所属していた。お祭り（ツェチュ）で披露される、お面を着用する仏教の踊り（チャム）を長年踊られていた。

質疑応答の内容：

昔は法律で家から1人は軍に入隊する必要があり、そこよりは知り合いのリーダーがいるRAPAが良いと思ってRAPAに入団したのがきっかけである。普通のフォークソングなら女の人も踊るが、チャムは元々僧侶の踊りであるため男の人が踊る。チャムの中にも種類が存在し、死後の世界や仏教を教える踊りもあり、踊りの中のストーリーを伝えることを踊るうえで大切にしている。今もお坊さんと話すたびに、RAPAで仏教を学べたことが良かったと感じている。以前はパロ、プナカ、ティンプーのツェチュではRAPAが踊っていたが、現在はティンプーだけでRAPAが踊っており、他の地域では踊りを教えるトレーナーとしての活動をしている。今では各村に踊りの先生がいて、各村で踊り手を選出するという仕組みになっている。

考察：

民族政策、同化政策と踊りは一体である。以前はツェチュをしていなかった地域でもツェチュが導入されるようになり、その内容も画一化されてきている。元々ツェチュが行われていたのはパロやトンサで、プナカやティンプーでツェチュが行われるようになったのは比較的近年のことであり、南の方でも増えてきている。ゲンボさんのインタビューの中でも、以前はRAPAが踊っていた地域でもその必要がなくなり、昔よりもチャムを踊れる人が増えている現状が見受けられた。都市化してコミュニティが存在しないティンプーではRAPAが踊るが、他の地域ではコミュニティに踊り手が存在する。帰りのバスの中の会話で、チランという地域ではヒンドゥー教徒のチャムの踊り手もいることを知った。

コメント・備考：

ゲンボさんは額に祈りだこができるほど信仰の厚いかたで、ナショナルアイデンティティについてのインタビューの中でも、根拠が論理的に落とし込まれた強固なアイデンティティを持

っていることが見受けられた。ゾンカが大切な理由について、それ以前の他のインタビューでは「国語だから」という理由が中心であったのに対して、「地域ごとに言葉が違いつながりがない状態から、言葉が通じるようにしてくれた」とおっしゃっていて目から鱗が落ちた。人生の大半をブータンで過ごすべき理由について、「外国を見てしまうと欲が生まれて満足できないようになってしまう。あるものを探すとないものが見えてくる」と回答されたことに対して、ゲンボさんの仏教観と併せてその日の夜は議論が巻き起こった。

担当者：リップル アメリ

14. 王立ブータン大学パロ教育カレッジ訪問

訪問日時：2月13日（月） 14:30～16:30

訪問先：王立ブータン大学パロ教育カレッジ

面談者：ツェワン・タシさん（王立ブータン大学パロ教育カレッジ教員）

ドルジ・レトさん（王立ブータン大学パロ教育カレッジ教員）

ツェリン・ドルジさん（王立ブータン大学パロ教育カレッジ教員）

概要：

①ウェルカム・ティー

スジャ（バター茶）とデシ（黄色いご飯で、ブータンでは特別なときに出される）を出していただいた。

②学生による楽器演奏

ブータンの伝統楽器に合わせた歌のパフォーマンスを鑑賞。

③王立ブータン大学パロ教育カレッジの音楽コースに関するプレゼンテーション

ツェリン・ドルジ先生によるゾンカ語でのプレゼン。ブータンの伝統文化を守るかたちでの音楽教育を普及すべく、上記3名の先生がご尽力されているとのこと。

④キャンパス・ツアー

学内施設の見学、講堂での簡単な文化交流。

質疑応答の内容：

プレゼンテーション後の質疑応答にて

今野）音楽を教えるうえで、ボキャブラリー的にゾンカ語による教授は可能か？また考えているのか？

ツェリン先生）元々英語のものは、そのまま英語で教える予定。場合に応じて、英語とゾンカ語を併用していく。

考察：

ブータンでは未だ芸術分野における教育が確立していないため、今この瞬間にも自国の伝統文化を守り抜くための改革が行われている現場は、まさに時代の過渡期に立たされているブータン

社会そのものであると実感した。また日本と比較した際、確かに我々は「音楽」の科目の中で、琴をはじめとした日本の伝統文化・音楽を享受する機会に恵まれている。かつ、そうした文化体験が自然に日本人としてのアイデンティティを育んできたと気づかされたことから、学校教育が担う音楽教育がどれほど国民のアイデンティティ形成に影響するのか、また重要であるかについて理解できた。

また、キャンパス・ツアーで見学した施設の中でも特に図書館が印象に残った。幼児教育の本からゾンカ語の専門書、英語文献など、簡単に館内を回っただけでも様々な種類の蔵書を見取ることができた。一方で“大学”の図書館として考えると、少々蔵書数に物足りなさを感じる面もあったが、街で見かけた本屋さんを思い起こすと、王立ブータン大学の図書館は遙かに整備されたすばらしい環境であると分かる。この差に注目したとき、ブータンでは果たして人口の何割が自由に文献（電子媒体を除く）にアクセスすることができるのか、またその需要があるのかについて疑問を抱いた。

コメント・備考：

急遽ヴァイオリン演奏を披露した山本さんが、ちょうどその教員を熱望している先方よりご縁あるお話をいただいた。今後の展開に注目しつつ、皆とても応援している。

担当者：安藤 承子

(6) 写真



ブータン到着直後の履修生たち



JICA ブータン事務所でのレクチャー



JICA ブータン事務所のナショナル・スタッフへのインタビュー



ゾンカ開発委員会訪問



ブータン日本語学校の生徒との交流会



ブータン日本語学校の皆さんと



キリスト教の教会でのインタビュー



ファブラボ CST(王立ブータン大学科学技術カレッジ)訪問



プンツォリン市内散策



スーパーマーケットでの市場調査



ホストファミリーに話を聞く①



ホストファミリーに話を聞く②



ホームステイ先での夕食



乳搾りのお手伝い



王立ブータン大学パロ教育カレッジでのレクチャー



タクツァン僧院訪問

3. 資料

(1) 募集要項

※お茶の水女子大学シラバスより抜粋。

科目名	国際共生社会論実習 国際共生社会論フィールド実習
科目区分・科目種	全学共通科目 共通科目（前期課程）修了要件外
クラス	全学科 博士課程共通
単位数	2.0 単位
履修年次	1～4 年 博士前期課程
担当教員	平山 雄大 小田 亜紀子
学期	不定期
受講条件・ その他注意	履修希望者向け説明会（5 月開催）の後、履修希望者が提出する語学試験の成績や小論文を総合的に審査し履修生を決定します。 事前学習（6～8 月／11～1 月）、現地調査（8 月下旬／2 月上旬、8 日間）、事後学習（10～11 月／2～3 月）への参加が必須です。現地調査のみの参加は認められません。 現地調査の訪問国はブータンを予定していますが、先方国の事情等によって変更になる場合があります。また新型コロナウイルスの状況次第では、現地調査の日程が大幅にずれることや、現地に行くことができずに代替の活動を行うことも想定されます。
授業の形態	講義／実習・実技／対面授業のみ
主題と目標	本科目は、開発途上国を巡る諸相と国際協力・SDGs に関する理解を深めることを目的として実施する実習科目である。 履修生は、開発途上国における研究・実践の実績を有する担当教員の指導のもとで、①事前学習（6～8 月／11～1 月）、②現地調査（8 月下旬／2 月上旬、8 日間）、③事後学習（10～11 月／2～3 月）を行い、貧困、ジェンダー、教育、地域間格差等のグローバルな課題について理解を深める。 具体的には、①事前学習において、在日外国人や留学生とのワークショップ、外部有識者による講演を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等の現状を学んだうえで、興味関心・問題意識に則した研究課題を各自で設定し現地調査の計画を策定する。②現地調査では、各自の研究課題に関連する諸機関の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織等へのインタビュー、現地の大学生との意見交換等を行うと同時に、

	その国に根づく文化・価値観・生活様式等に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する（国際共生社会実現へのヒントを見つける）。帰国後は、③事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、報告会の開催等を通してその成果を外部へ発信する。 【到達目標】 1. 漠然とした興味関心・問題意識を、学術的な研究課題として組み立てまとめる力を身につける。 2. 現地調査の計画及び実践を通して、調査技法を身につける。 3. 現地調査（特にインタビューの実践）を通して、英語によるコミュニケーション能力を向上させる。 4. プログラムを通して得た学びを、さらなる学習・研究や国際協力の実践活動（インターンシップ、ボランティア等）に繋げる。
授業計画	【①事前学習】（6～8月／11～1月） 在日外国人や留学生とのワークショップ、外部有識者の講演等を通して訪問国の歴史・政治経済・社会等に関する理解を深めるとともに、履修生各自が興味関心・問題意識に則した研究課題を設定し現地調査の計画を策定する。 【②現地調査】（8月下旬／2月上旬、8日間） 計画に基づいて現地調査を実施し、履修生各自の研究課題に関連する諸機関（学校、保健施設、政府援助機関、NGO等）の訪問・見学、都市部・農村部に暮らす人々や住民組織へのインタビュー、現地の大学生との意見交換等を行うと同時に、その国に根づく文化・価値観・生活様式等に触れ、異文化への、もしくは開発途上国への自分なりの対峙の仕方を模索する。 【③事後学習】（10～11月／2～3月） 帰国後はグループワークを中心とした事後学習を通して現地調査の内容を振り返り、研究課題に分析・考察を加え報告書を作成する。また、報告会開催等を通して、その成果を外部へ発信する。 ※スケジュール ・履修希望者向け説明会（5月11日（水）、5月13日（金）） 時間はいずれも 12:30-13:00。場所は共通講義棟 2号館 101 教室。 両日同じ内容について説明する。履修希望者はどちらかに参加するこ

	と。 ・選考（5月中旬～下旬） ・事前学習（6～8月／11～1月） オリエンテーション、安全対策講習会を含め6回程度。 ・現地調査（8月下旬／2月上旬、8日間） 訪問国はブータンを予定している。 ・事後学習（9～11月／2～3月） 報告会における発表、レポート提出等。
時間外学習	参考文献の講読等を通じた授業の予習、発表に向けた準備、レポートを作成するにあたっての情報収集・文献調査等が必要です。

（2）全体スケジュール

履修説明会	5月11日（水）12:30～13:00 共通講義棟2号館101教室 5月13日（金）12:30～13:00 同上
履修者募集	5月11日（水）～5月25日（水）
選考結果の通知	5月30日（月）
オリエンテーション	6月14日（火）12:20～13:10 グローバル協力センター
事前学習	6月21日（火）9:00～10:30 グローバル協力センター 6月28日（火）9:00～10:30 同上 11月10日（木）9:00～10:30／15:00～16:30 同上 11月17日（木）9:00～10:30／15:00～16:30 同上 11月24日（木）9:00～10:30／15:00～16:30 同上 12月1日（木）9:00～10:30／15:00～16:30 同上 12月8日（木）9:00～10:30／15:00～16:30 同上 12月15日（木）9:00～10:30／15:00～16:30 同上
現地調査	2月7日（火）～2月16日（木）
調査報告書提出締切	2月28日（火）
事後学習	3月2日（木）11:00-14:00 グローバル協力センター 3月14日（火）13:00-16:00 グローバル協力センター 3月15日（水）10:30-16:00 国際交流留学生プラザ研修室1 3月17日（金）10:30-16:00 同上

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和4（2022）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」
スタディツアー（ブータン）実施報告書

2023年3月

発行：お茶の水女子大学グローバル協力センター

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel&Fax：03-5978-5546

E-mail：info-cwed@cc.ocha.ac.jp

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

令和4（2022）年度「国際共生社会論実習」「国際共生社会論フィールド実習」
スタディツアー（ブータン）実施報告書



お茶の水女子大学